
異形の魂を宿す者

畏無

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異形の魂を宿す者

【Nコード】

N3851V

【作者名】

畏無

【あらすじ】

人格 の名を持つ異形……その魂を宿したいた青年が転生者（飯）として色々頑張る物語

プロローグ（前書き）

始めちゃいました…

よろしくお願いします

では、本編をどうぞ

プロローグ

俺の名前は遠坂霧夜。とおさかきりやんで、年齢は16だ

そして俺は……ついさっき事故で死んだ

事故の原因は居眠り運転していたらしい相手の自動車が、歩道を歩いてた俺にぶつかったから

このまま天国か……なんて考えながら気を失ってた筈なんだが…

目を覚ました俺が居たのは真つ白な空間

この空間には俺と……何故か少女が居た

「少女じゃありません！」

いや、見た目からして少女しかないだろ

他になにがあんだよ…？

「私は貴方達で言う天使なんですよ！？」

天使（自称）と目の前の少女は俺に名乗った

「一体なんですか、自称って！ 私は本当に天使なんですからね！」

「黙れ少女」

「だから私は少女じゃありません！！」

おふざけはとりあえず置いて、俺は天使（少女）に訊いてみた

「だから私は少女じゃなんかありませんって！！」

「なんでもいいが、なんか俺に用なのか？ 本当に天使ならさつさと天国にでも俺を送れよ。どうせ俺は死んでるんだからよ」

「そうしたいのは山々ですが……貴方の魂が何故か天国にも地獄にも連れて逝けないから、私も困ってるんですよ！！」

天使（幼女）、多分字が違うぞ？

……いや、合ってるのか？

というか、今天使（幼女）はなんと言った？

俺の聞き違いでなければ、『天国にも地獄にも連れて逝けない』って言わなかったか？

聞き違いだと信じたかった俺は天使（幼女）に訊いた

「おい幼女、今なんて言った？」

「だから私は幼女じゃないも「さつさと答えろよ」分かりましたよ……だから、貴方の魂が天国にも地獄にも連れて逝けないから私も困ってるって言ったんですよ……」

……よし、この天使（幼女）絞めてやろうか

なんで俺は天国だけじゃなくて、地獄にも逝けないんだよ！？

俺生きてる間になんか悪いことしたか！？

……結構したかも

一歩間違えるとヤバイ事になってたしな……まあ、生きていく為には仕方なかったことなんだが………そーいや、あいつら2人元気にしてっかな？

けど、あいつらは俺と違って何もしてない筈だしな

「あの一説明してもいいですか？」

「ああ、すまん。頼んだ」

「分かりました。えつと……どうやら、貴方の魂になにかあるみたいなのですよね」

マジか！？

…だが、色々な意味で天使も堕ちたものだな

「それ、ちょっと酷くないですか!？」

「全く酷くない」

「明らかに酷過ぎですよ！！（涙目）」

この程度で泣くとは……流石幼女だな

「よう……じょじゃ、グスな……いもん……うええええええええええええええええん！
！！！」

ああ、遂に泣き出しちったよ……
さて、どうすっかな？

少々お待ち下さい by 霧夜

かなり時間が経ったが、とりあえず天使（幼女）が落ち着いたみたいな感じだから、俺は訊いてみた

「私幼女じゃないです…」

「別になんでもいいが、俺はなんで逝けないんだ？」

「えつとですね……多分、コレのせいですね」

と天使（幼女）がパネルを出して見せてきた

…なんでパネルなんだ？

とりあえず…

「なんで俺の心臓の形がハート形なんだよ！？」

「とりあえず、心臓にある丸くて赤い石が原因の様ですね」

天使（幼女）め、無視しやがった……けど確かに、天使（幼女）が

出したパネルには、俺の心臓と思われる映像になにやら丸くて赤い石があつた

だが俺は敢えて言おう…

「嘘だ！！」

「本気で思ってます？」

「全く思つてない」

嘘だとは全く思つてる訳ではないが、これは流石に驚いたな……まさか、心臓にこんな石があつたなんて……というか、それが原因で天国や地獄に逝けないみたいなんだよな？
この石つて…… どんだけ凄いんだよ！？

「とりあえず、この石に触れて干渉してみますね？」

天使（幼女）はそう言つと、自身の腕を俺の左胸にノーアクション＆スツと入れてきた

…痛みが無いのもあるが、躊躇無く腕を入れてきた天使（幼女）のノーアクションな行動にはかなり真面目に驚いた…

「つて無茶苦茶痛えよ！なんか絶対心臓だけを握つてるよな！？
更に、石以外の心臓の部位だけを器用に触つてるよな！？」

「…私、幼女じゃないもん（ボソッ）」

まだ恨んでたのかよ！！

分かりました！分かりましたよ！貴方は幼女じゃありません！！ただ身長の小さい女性なだけ…

大変申し訳ありませんが、少々……いえ、暫くお待ち下さい
y天使 b

いかん、スゲエ気持ち悪い……真剣^{マシ}で死ぬかと思った

「霧夜さんは既に死んでますけどね？（クスクス）」

この天使（幼女）め、クスクスと笑いながら俺の揚げ足取るな。ちよつと背筋に寒気を感じたじゃねえか……というか、何故俺の名前を知ってるんだ？

「私、天使ですから」

そついや、さつきから色々と連続でツツコミやってたな……流石は天使（幼女）だn……はい、すみませんでした
だから、俺の心臓をノーアクションでグツと掴まないで下さい
掴まれると、真面目に痛いんだぞ!?

「全く……私は貴方という存在が完全に理解出来ません……という
か、あまり理解したくありません」

天使め、はっきりと言ってくれるじゃねえか……さてつと、干渉と
やらをさつさとしてもらえませんか?

「分かりました では、干渉開s……」

天使の声を聞きながら、俺の意識は沈んでいった…

プロローグ（後書き）

畏無「遂に始めてしまった…どうも、畏無です」

???「おい、さつさと俺のこと紹介とかしろよ」

畏無「面倒な…本作品の主人公、霧夜君です」

霧夜「よろしく」

畏無「さて、本日は時差別でもう一度投稿する予定なので、また会いましょう」

霧夜「短いな……んじゃ、失礼します」

プロローグ2（前書き）

プロローグが前回で終わったと思った方、残念！

霧夜「畏無はバカだから気にするな」

酷くない？

霧夜「酷くない」

（ ; ; ）

霧夜「んじゃ、本編どうぞ」

プロローグ2

天使（幼女）SIDE

私、幼女じゃないもん！
名前の表示直してよ！！

申し訳ありませんが、少々お待ち下さい・・・

天使SIDE

ふう、やっと直りました
さてつと、私は亡くなった方の魂を回収して天国か地獄に運ぶ役割

をしている天使で、ゼウス様達には『天ちゃん』と呼ばれているのですが……なんで他の天使達は天使と呼ばれてるのに私だけ『天ちゃん』なんでしょうかね？

…とりあえず私の呼び名等は置いて……本日私が回収した魂……遠坂霧夜さんの魂を天国へ送るのが今日の私の仕事なんですが、何故か霧夜さんの魂が全く天国に逝ってくれないんですよね

(…もしかして、地獄逝きなのかな？)

そう思った私は霧夜さんの魂を次に地獄へと送ろうとしたのですが、地獄にすら全く逝ってはくれませんでした

「なんで天国だけじゃなくて、地獄にも逝かないの!？」

原因を探る為に、私は霧夜さんの魂と対話をしたのですが……霧夜さんはなんで私のことを何度も何度も幼女って言うんですか!？

皆さん、霧夜さんって酷いと思いますよね!？

とりあえず霧夜さんを調べたら心臓に赤い石があつたので、恐らくこれが原因と思った私は干渉しようと触れたのですが…

「…これは全くもって予想外過ぎなのですよ」

私の目の前に居た筈の霧夜さんは居なくなっていて、変わりに居たのは《スパロボ》というアニメやゲームに出てくる地球をルーツとする生命を監視するために生み出された人造生命体……アインストそのアインストの頭と言える存在である《ノイ・レジセイア》が作り出された擬人型アインスト……アルフィミイが搭乗していた機体、《ペルゼイン・リヒカイト》そのものだったのですから…

えっ?なんでこんなに詳しいのか?

知り合いの神様がハマってるゲームで、何故か教えてくれました

SIDE OUT

??? SIDE

「誰じゃ！許可無しで天界の近くにペルゼインを召喚したのは！！」

さつきからゼウス爺様が怒鳴るから、頭が痛い

ただでさえ眠いの……

全く、突然こんな夜中に収集が掛かったから何事かと思ったら……

実は私、自分の名前とは逆に夜にはめっぼう弱いよね……

けど、天界の近くでペルゼインを召喚するなんて……召喚した神が

天使は勇気あるわね

誰かは知らないけど、誰が召喚したのかちょっと覗きに行こうかしら？

とりあえず、全は急げね

「というわけだから……アポローン兄様、ゼウス爺様に説明とか色々よろしくお願いしますね」

「なっ！？待つんだ、アルテミス！！」

「アポローン兄様？ 私は待ちませんよ？」

私はアポローン兄様にそう言いながらゼウス爺様の執務室から出た
勿論目的地は……ペルセインの召喚された場所ね

SIDE OUT

天使SIDE

さつきから私とペルゼイン（おそらく霧夜さん）は睨み合っただままの状況で、別に何も起きてないのは問題無いのですが…

（もしかして、霧夜さんの心臓にあったあの赤い石はペルゼインのコアだった……ということなのでしょう？　もしそうなら、色々と神様方に報告しなければならんですが……しかし、今この場を私が動いたらペルゼインがなにをしてくるか分からないわけですから…）

等と色々と頭の中で考えながら現状維持に努めているわけで…

『……………』

「……………」

それでも……やっぱり怖いものは怖いんですよ!?

なんで私がこんな目に遭わないといけないんですか!!　私はただ自分の仕事してただけなのに!!

『…奴八何処二行ツタ』

「ひゃい!？」

私の思考が処理しきれない時に突然喋ったペルゼインの言葉で、私はつい驚いてしまいました

…ですが私はこの時、ペルセインの言葉から1つの疑問を得ました
それは…

（『奴は何処に行つた』って、一体どういう…）

私が出た疑問を考えていると、何処から一本の矢が飛んできて、
その矢はペルゼインの左胸に刺さりました

そしてペルゼインの左胸に刺さつた矢が消え始めたのと同時にペル
セインの姿が段々消えていき、最終的にペルセインの居た場所には
霧夜さんがまるで眠っている様な雰囲気であれていました
ところで、さっきの矢は…

「大丈夫だつたかしら？天ちゃん」

私が後ろを振り向くと、弓を構えたアルテミス様が居ました

「あ、アルテミスさまあゝ（泣）」

私は泣きながらアルテミス様に抱きつくと、アルテミス様が「よし
よし」と言いながら頭を撫でてくれました

「…けどまさか、天ちゃんがペルゼインを召喚するなんて思わなか
つたわ」

「…召喚？何の事ですか？」

「…一体どういふことかしら？」

私はアルテミス様に霧夜さんのことや心臓にあつた石等を全て説明
しました

「…なるほど、そういう事態だったの」

「そうなんですよ」（泣）

アルテミス様は未だに私の頭を撫でながら倒れている霧夜さんを見ます

霧夜さんを見たアルテミス様の眼を、私は忘れられません……その時のアルテミス様の眼は何か懐かしい物を見ている様だけども……どこか悲しそうな……そんな眼をしていました……

暫くし、アルテミス様は私の頭を撫でるのを止め、霧夜を見ながら頷きました

そして、**頷いた後**：

「とりあえず、彼は私が引き取るから。悪いけど、ゼウス爺様とアポローン兄様によろしくね」

[illegible]

私が叫ぶ中、アルテミス様は私を手を振りながら楽しそうに去って行きました……霧夜さんの首根っこを持って、更には霧夜さんの頭を引き摺りながら……霧夜さん、御愁傷様です

SIDE OUT

霧夜SIDE

俺が再び目を覚ますと、何故か異様に頭が痛かった

「って、なんか俺引き摺られてないか!？」

「あつ、気がついたんだ」

俺が振り返ると、俺の首根っこを掴んだまま歩いている女性が居た
この女性、どこかで見たことあるような……ってか、その前に…

「だから痛いって!!」

「あら、そうだったわね」

女性は俺の首根っこを離れた後、一瞬で俺の前に移動してきた
って、速っ!？

「えっと、貴方は霧斗君……だっけ？」

「霧夜だ」

「そうそう、切矢君」

おかしいな、発音が一緒なのに字が違う気がするのは何故だ…

「あつ、私はアルテミス。とりあえず神様やってるけど、よろしくね」

「アルテミスって…」

神でアルテミスと言えば、ギリシア神話に登場する狩獵と純潔の女神で、後に月の女神となつたつてアレのことだな

「へえ、貴方意外と詳しいのね？」

「まあな」

女性……アルテミスは俺を不思議そうに見た後、俺の左胸に手を置いてきた

「なっ！？一体なん「本当にあるみたいね」……なにがだよ？」

「ん？ペルゼインのコアだけど？」

ペルゼインってなんだよ？

「…なんか、ペルゼインで色々自分が置かれている状況が分かってないみたいだから、教えてあげるわ」

「…よろしくお願いします」

アルテミスが霧夜に説明中・・・

「…って感じよ。分かったかしら？」

分かったって言うより、まさかスパロボに出てくる敵のコアが俺の心臓にあった石だったのが一番の驚きだったんだがな…

「さっき貴方、そのペルゼインになってたのよ？」

「…マジで？」

「真剣^{マジ}よ」

アルテミスが腰に手を置きながら言ってきた（その時、目の前で何かが2つ程揺れた様に見えたのは全くもって気のせいだ…）
にしても、そこまで言うことなのか…？

ん？てことは、俺が天国や地獄に逝けない原因はそのコアというわけなのでは？

「そういうことね」

うわぁ……俺、オワタw

まさか、いつの間にか人というカテゴリーから外れてたとは…

「というわけだから……君はこれから私の玩具にしてあげるわ」

…はい？

今日の前の神様はなんと言った？

人を玩具にすると言わなかったか？

「アルテミスさんや……頭大丈夫k「その頭、射たれない？」変なこと言つてすみませんでした」

弓を構えるアルテミスさんに向けて俺はジャンピング土下座をするいや、一気に5本も矢を引っ張られたら流石に恐いつて!？

そして、アルテミスさんは弓を下ろすと、何故か楽しそうに玩具発言について説明してくれた

「…要は、俺がアルテミスさんに転プレしてもらうと」

「まあ、正確には貴方という魂や存在をペルゼインのコアと一緒に全て 転生者という 器 に変換するって感じね」

まさか、二次創作でしか見たことない転プレを体験する事になるとは……ん？

転生者〓玩具ってことは…

「他の転生者達も神様方の玩具ということか？」

もしそうなら、俺凄いい嫌な気分になるんだが…

「あまり知られてないけどね……あつ、けど幾つか例外が居るけどわね」

「例外？」

「神を敬わないで親しげに会話をする転生者、神を超えた転生者、神と同等になった転生者とか色々居るわね……そうそう、最近の質悪い転生者は神に見捨てられて行方不明になったり、神に敵対するのも居るわ」

…転生者って、凄いな

なにが凄いのかは上手く説明出来ないが……とにかく凄いな

「とりあえず、器に変換した後貴方には修行してもらってから」

修行ねえ……って

「…はい？」

「だって、貴方を器に変換するだけなんだから、身体能力とかは一般人と同等なのよ？……まあ、貴方はペルゼインに変化出来るわけだから、その時（ペルゼイン状態（またの名をアインスト化））の制御か……または自分の力として完全に制圧してもらわないと危ないから。…分かったわね？　ちなみに拒否権は無いから」

どうやら俺は（拒否権全く無しで）転生者になるみたいです…

プロローグ2（後書き）

霧夜「さて、とりあえずこれでプロローグは終わり……だよな？」

その通り

ついでにこいつを後書きに呼んでみた

天使「どうも、「幼女」です…って、霧夜さん！声被せないで下さい！！」

幼女！幼女！

天使「作者もですか…」

霧夜「頑張れ幼女」

天使「だから、私は幼女ではなく、天使です！！」

霧夜「まあ、いつか」

そうだね〜（＾．＾）y・

天使「酷過ぎです！！」

霧夜「んじゃ、次回も頼みます」

よろしくお願いします〜

天使「私無視ですか！？」

霧夜「えっと、竜華零さんと雨季さん……早速感想ありがとうございます」

天使「それでは」

【第零話】転生直前（前書き）

前話である『【プロローグ2】』にて、色んな読者様方から「スパロボを知らない」や「説明不足」等、自分の執筆の修正箇所を指摘が多々あったので、指摘ありがとうございました

なので、本作品に出てきた単語の説明はこの本編の後にさせていた
たぎます

申し訳ありませんが、これからもよろしく願います

それでは、本編をどうぞ

【第零話】転生直前

霧夜SIDE

どうも、形だけ転生者になった霧夜だ

あれからすぐに俺の師匠になってくれるらしい人達が来て、それからずっと修行三昧

別に文句とかがあるわけじゃないし、寧ろ感謝してる

ただ…… 形だけ の転生者ってのはやっぱりキツイと思ったただけだ

身体能力が一般人と同じレベルだから、転生者と同じレベルまで上がるのに真剣^{マシ}で死にかけた

まあ、そのおかげで師匠の考えてくれた修行のステップ1（ステップは全部で3まである）に無茶苦茶時間（もとい年月）が掛かったんだがな…

ちなみにステップ1では危機察知能力と見切りの修行や、戦術講座、常に技は開発し続ける開発力、柔軟運動による反射神経等、更にアインストの制御系を鍛えるのが主な内容（マラソンをしながら師匠達の攻撃（ギリギリ俺が避けれるレベルの）を避けるという2つの行動を並行して体力を、危機察知と見切り、精神統一等で精神を鍛えてくれるのは貴史師匠と霞師匠、柔軟運動で反射神経等の体を鍛えてくれる薫師匠、柔軟な思考による戦術講座や開発力の講義をしてくれるカスミ師匠、自身に内包している異形（俺で言うアインスト）等の気持ちや扱い方を講義してくれるのは要師匠、強い力の意志によって屈服させ、従わせる&対話して洗脳して主至上主義（

?)等のアインストに対する制御系の修行をしてくれるのが薫師匠とカスミ師匠)

んで、無事にステップ1を合格(?)した後はステップ2に上がった

ステップ2の内容はステップ1の内容を少し減らして次の修行をするというもので、勿論ステップ1の修行もちゃんとやる

ちなみに、ステップ2の修行はカスミ師匠が魔法や魔術を、薫師匠と霞師匠が武器の使い方を、貴史師匠が格闘技を、要師匠が異形化(アインスト化)した状態での戦い方を教えてくれるというもの

そして、ステップ3に進んだのだが……ステップ1と2が楽だと思っくらくらいにステップ3軽く死ぬる

まずは武器だけで戦う制限模擬戦

相手は薫師匠と霞師匠

霞師匠が色んな宝具で攻撃してくると、雷帝モードになってる薫師匠がちよくちよく攻撃してくるのがキツい

二番目は魔術や魔法だけで戦う制限模擬戦

相手はカスミ師匠

SLB等を撃ちながら漆黑魔法も撃ってくる

更に星のバックアップがあるから実質魔力無限勝てる気がしない

三番目は格闘技だけで戦う制限模擬戦

相手は貴史師匠と要師匠

貴史師匠と要師匠の息が綺麗に揃っているから、実質2人で俺1人をフルボッコしてる様な状況

だけどカスミ師匠よりは若干楽な気がする

四番目はアインスト化だけで戦う制限模擬戦

相手はORTって巨大な蜘蛛化した要師匠なんだが……ORTの硬さがチイトな程異常過ぎる

おにれんげ

鬼蓮華では表面に傷が付けれる程度で、未だに斬れない

真面目に悔しい

最後に総合模擬戦

相手は貴史師匠

自分が持つてる力を最大限使っているが、全く歯が立たない
真剣で涙出た

そして今は総合模擬戦をやった後の休憩中

休憩後は師匠達との一騎打ちの修行で、最初の相手は薫師匠、二番目がカスミ師匠、三番目が要師匠で、四番目が霞師匠、そして最後が貴史師匠

…マジで前が霞んできた

「お久し振り〜」

俺がちよつと鬱になりながら顔を服の裾で拭いていると、アルテミスが何故か楽しそうにやって来た

確か、アルテミスと前に会ったのはステップ1が終わる直前だったから……大体5年前位か？

「貴方の感覚的にはね？外は貴方を器にしてから1週間位しか経ってないわよ」

「マジかよ……」

実は俺が今居る場所……確か空間や、空間居る人（転生者も含む）の外見の時間等が止まっている感じ（正確なことは俺も知らない）の部屋らしい

おかげであまり外見は変わってない

ただ髪がちょっと伸びて邪魔後ろで結んでることを除いては…

「にしても……よくこんな凄い師匠達を呼べたな」

「今頃ね」

確かに今頃だな…

だけど、ちよつと前から気になってたんだよな

「実は、貴方の師匠達は皆転生者の中でも上位に君臨してるメンバーで、私がゼウス爺様をお願いして呼んでもらったの」

ゼウス爺様って……多分、あの色んなことで有名なゼウス神のことだよな？

確か、オリュンポス十二神をはじめとする神々の王で……ギリシア神話の主神たる全能の存在

そして、天候……特に雷を司る天空神でもある……だったか？

「やつぱり詳しいのね。ちなみに、向こうの神々に頭を下げてくれたのもゼウス爺様よ」

ゼウス神様、自分の為にお疲れ様でした

そして本当にすみませんでした

「…そういや、なんか用があつたんじゃないのか？」

「えつとね……そうそう、貴方の行く世界決まったから教えに来たわよ」

いきなり過ぎる……

俺は驚きながらもアルテミスに訊いた

「……で、どんな世界？」

「えつと、確かね……《ネギま!》の世界よ」

何故に《ネギま!》の世界なんだ……?
てか、誰が選んだし……

「世界を決めたのは……アポローン兄様よ」

アポローン兄様って……あんた(アルテミス)の双子の兄にして、オリュンポス十二神の1柱とされる神のアポローンか
確か、古典時代のギリシアにおいては理想の青年像と考えられたと言われて、日本語ではアポッローンとか呼ばれたっぽくて……んで、長母音を省略してアポロンと呼ばれることが多いらしい……筈だよな?

「なんでそんなに詳しいのかしら？」

「昔の知り合いに詳しいのが居たからな……有名な神々は大体分かると思う」

そっぴや、なんであいつはあんなに神話に詳しくったんだ?
特にギリシア神話関連

まあ、俺は死んでるわけだから別にどうでもいいがな

「それじゃ、行く時間^{とき}が決まったら迎えを寄越すわ」

「ん、分かった」

アルテミスが部屋を出ていくと、嫌な予感がしたから俺は急いで頭を下げた

すると、頭の真上をカスミ師匠の魔法が通り過ぎていったのを感じた

「いつまで休憩してるつもりだ？馬鹿弟子」

「すみませんした、カスミ師匠」

「罰として私達との一騎打ちの全てに私の魔法を避ける。いいな？」

「…了承しました」

…さて、もつと修行頑張りますかね

SIDE OUT

アルテミスSIDE

霧夜君の修行部屋から出た後、自室に向かっていた
すると…

「あつ、アルテミス様。お久しぶりです」

後ろから1人の青年が近づいて来た

彼はハデス神の と特殊な盟約を結んだ人物で、色んな神々と親しい仲の存在でもあるのよね

「ん？なんか良い事でもあったんですか？いつもより表情が明るく見えます」

「そ、そう…？」

それはやっぱり

が原因……かな？

SIDE OUT

天使「どうも、天使です。ここからは『プロローグ2』で分かんかったと思われる単語をピックアップし、説明させていただきます」

アインスト

とあるゲームにて、地球圏全域に突如として現れた正体不明の生体

群の総称

その正体は生命が誕生するより遙か昔、地球をルーツとする生命を監視するために 思念体 によって生み出された人造生命体

階級ごとに役割が分かれていて、更に上位のアイNSTは意思を持つてゐるおり、ハチやアリのように下位のアイNSTを生み出して使役する

普段は自分達の為に作り出した異次元空間に生息しているが、宇宙に現れる時に異常な重力帯が発生して、ストーンサークルが形成されることもある

人間の可聴域を越えた音波を発し、無人機や人間を乗っ取って操作し配下に収めてしまうことが可能（一定以上の《意思》を持つ場合は操作されない）で、対象を理解する為に相手の情報をもとにコピーを作ることもある

アイNSTには、身体の中央部に球体状のコアを持っており、これを破壊されない限りは自己再生が可能である

また、撃墜あるいは最上位個体が撃破された場合、破片等まで完全に消滅してしまう為、残骸を回収することはもちろん、解析も出来ない

ノイ・レジセイア

アインスト達を統べる、最初にして最上位のアインスト

本来は全てを見守る為だけの存在だったが、自分たちが望む進化をする生命を作り出すべく、人間に干渉する

そして、人間に代わる新しい知的生命体を創造する為に、様々な世界にアインストの種を撒いている

言わば 女王蜂 とても言うべき存在

アルフィミニ

アインストの幹部格ともいえる少女で、「ですの」という語尾をつけゆっくりと喋る独特な口調が印象的

アインスト達の中で唯一人間に近い姿をしていて、見た目の年齢は13〜14歳前後と推測される

その正体は、人類との接触及び調査をより円滑にする為に作り出さ

れた擬人型アインストで、搭乗機体はペルゼイン・リヒカイト

ペルゼイン・リヒカイト

アルフィミイの搭乗機で、怨霊や鬼を連想させる面のようなパーツを全身にあしらった、赤い鎧武者のような外見が特徴

見る者に強烈なインパクトを与えるその鬼ないし髑髏の仮面は人格を表現していて、鬼の装飾は人類全体のデータから導き出されたものらしい

そして 鬼面 は、女性の怨念を具現化したものではないかとされる他のアインストと異なり、母体であるノイ・レジセイアよりもアルフィミイの意思を優先して動く

取り込んだものを再生させる能力を持っていて、傷ついたある女性を收容し、その内部で女性にアインストの細胞を与え、再生させたこの時に生み出されたのがアルフィミイである

ペルゼインの頭部には複合センサーとしての機能が集約されていて、更に額の球状パーツには思念受信機と思念波による精神攻撃の役割

を持っている

ボディは主に骨格、外皮、軟質の筋繊維状のパーツで構成され、上腕部は骨格が存在せず触手のみで繋がっており稼動範囲が広い

ペルゼインの武装は、太刀の 鬼蓮華（本来はオニレンゲ） 一本で、あとは内蔵武器となっている

そして、ペルゼインの左右には浮遊する鬼面砲 本来は鬼菩薩^{オニボサツ}が帯同していて、更に鬼菩薩は鬼面部分から骨格状の体を作り出し、それ自体が別個のアイnstとして活動することも可能

天使「これにて説明を終わらせていただきます。ありがとうございました」

【第零話】 転生直前（後書き）

というわけで、霧夜の修行とアインストの説明でした

天使「今回は誠にすみませんでした」

霧夜「これからもよろしく頼みます」

天使「それと f a k u さん、249さん、竜華零さん、雨季さん、感想ありがとうございます」

今日は時間が有ればまた投稿する予定です
良かったらご覧下さい

霧夜「んじゃ、ばいなら」

【第壱話】時が来た…だけど移動手段が（汗）（前書き）

更新です！

霧夜「とりあえず本編どうぞ」

【第壹話】 時が来た… だけど移動手段が（汗）

霧夜SIDE

師匠達との修行（ステップ3）が一通り終わった
カスミ師匠曰く、「とりあえずは及第点」だそうだ

そして修行とは関係あまり無いが、要師匠のおかげで酒に無茶苦茶
強くなったのと、貴史師匠のおかげで若干胃痛になった

胃痛になった時、要師匠は何故か俺の肩を叩いた
その時の貴史師匠は「胃痛とはな……あいつみたいだな」と笑いな
がら言っていた

あいつって誰だよ…… だけど、分かったことが1つ
貴史師匠によつて、俺以外に胃痛を得た人物が居るということだ

修行が終わった後、霞師匠がすぐに姿を消した
要師匠曰く、「旦那のところに帰った」だそうだ

そのあと師匠達と別れを告げた俺は部屋の外に居た天使（幼女）と
話（という名の幼女弄り）をしながらアルテミスの部屋に案内して
もらっていた

「にしても…… 久し振りだな、天使（幼女）」

「まだ幼女って言うんですか!？」

何度でも言つと思つよ？

…そして、なんで（ ）の中が読めてるんだよ

「天使だからです」

まあ、幼女だからな
読めれても仕方ないな

「スルーですか！？そして幼女じゃありません！！」

ちなみに俺が好きなのは幼女では無い
幼女（天使）はただの弄る対象だ！！

「逆になってますし、弄る対象じゃ無いですし、完全にスルーなん
ですね！！」

こうしてツツコミをしてくれるしな…流石幼女

「もうこの人嫌です…」

天使（幼女）を弄りながら歩いていると、アルテミスの部屋と思わ
れる部屋から1人の男性が出てきた

天使は男性を見ると、途端に元気になり…

「悠さん」

「ん？おお、天ちゃん。元気だったか？」

「はい」

天使は男性に近づいて行き、男性は天使の頭を撫でていた
すると、男性が俺に気付き声を掛けてきた

「ん？まさか、お前が噂のビックリ人間か？」

「噂のビックリ人間ってなんだよ……」

男性は苦笑いをする、天使の頭を撫でるのを止め、俺を見てきた

「とりあえず自己紹介な？ 俺は橘悠^{たちばな ゆう}。ハデス神の部下で、転生者達の監察者をやってる」

ハデス神……確か死者が行く場所で、ギリシア神話の下界の神ハーデースからとった言葉と言われてる神……だったか？

「ほお……アルテミス様の言ってた通り、ギリシア神話に詳しいっぽいな」

「生前の知り合いのおかげでな……」

そっぴや、あいつ……今なにしてつかなく？

「ところで、悠さんはアルテミス様に何か御用だったのですか？」

「まあ、ね……ちょっと許可を貰いに来たんだ」

「許可って……まさか 例の件 ですか！？」

天使が驚きながら言った言葉に、男性……悠が若干暗そうに頷いた
例の件 って、なんだ？

「とりあえずアルテミス様には許可は貰えたから、後はゼウス神に

申請すればって感じだね」

「そうなんですか……ですが、本当に大丈夫なのですか？」

「若干……いや、だいぶ危険かもしれないけどね。この件で今動けるのは俺だけだしね。んじゃ、またね天ちゃんとビックリ人間君」

悠はそう言つと、歩き出そうとする
だが…

「ちゃんと待てや……俺はビックリ人間って名前じゃねえよ。俺の名前は遠坂霧夜だ」

俺が名乗ると、悠は何故か感心した様な顔をした

「そうか……もし逢えたらまた逢おう。またな、霧夜少年」

悠はそう言つと、俺達が来た道を逆に去って行つた
というか…

「少年ってなんだよ……」

外見を見る限り同い年くらいじゃねえか…

「悠さんはハデス様の妹様と盟約を結んでいる転生者みたいな存在で、天界では少し有名なんです」
「

天使が何故か楽しそうに言つが……ところで、ハデス神の妹って一体どういうことだ？

それに、転生者みたいな存在って…

俺は色々そんなことを思いながら、天使と一緒にアルテミスの部屋に入った…

SIDE OUT

悠SIDE

アインストのコアを体内に秘めているという噂のビツクリ人間……霧夜少年が天ちゃんと一緒にアルテミス様の部屋に入ったのを見た後、俺はとある部屋に入った……いや、入ったと言うより、戻ってきたというのが正しいかな？俺はこの部屋からアルテミス様の部屋に向かったわけだしな…

「よう、元気か？」

「あ、悠うー？私はいつも元気なんだよぉ」

「そうかよ」

この語尾が変な感じに伸びてるのがハデス神の双子の妹で、名前はネイカ

俺と盟約を結んだ相手であり、平行世界の神々との窓口をしているちなみに外見は白髪赤眼……確か、アルビノと言ったか？

それと身長が8歳くらいで、何故かスタイルが良い
このスタイルは確か…

「出るところは出てる、だったか？」

「なにがあー？」

む、どうやら口から洩れていたみたいだな

つまり、ネイカはアルビノのロリ巨乳ってやつだ

別に俺はロリコンでは無いし、ネイカの体にハアハアするなんてことは絶対有り得ない

というよりネイカ自身が…

「悠うゝ、これ読んでえゝ」

「誰がそんな百合な雑誌を読むか、アホ」

そう、ネイカは百合好きなのだ

最近は何故か俺に百合な雑誌を読むように勧めてくるのもあるが、もう一つ気になることがある

それは、ネイカがよく俺の背中に抱き付いてくる様になったことだ
ネイカの行動を見たハデスが前に「ネイカを頼んだ」とドヤ顔をしながら俺に言ってきたことがある

その時は思わずハデス神のドヤ顔を《護式・斬冠刀》で斬り掛かってしまった

理由は……ドヤ顔が苛ついたからしかないな
ちなみに後悔や反省は全くしていない

「ところでえゝ」

「ん?」

「数日前にい、例の《アレ》が確認されたっぽいんだよゝ」

…どうやら、《例の件》を急いで興す必要があるみたいだな

なんでって……いや、アポローン神が今回やられるのは当たり前じゃね？

そして天使（幼女）、よく嘯まずに『いや』が何度も言えたな…

「当たり前ね」

「当たり前なんですか!？」

さて、天使のツツコミが冴えてるからもう暫く弄りたいな
俺はそう思いながら再び天使を弄ろうとしたが…

「残念じゃが、時間じゃ」

そう言つて、白髪でシワシワな爺さんが部屋に入ってきた

「あらゼウス爺様、もう時間なの？」

この爺さんがゼウス神だったのか…

「ゼウス神、自分のせいでご迷惑おかけしてすみませんでした」

俺は素直にゼウス神様へ頭を下げた

理由は、俺の師匠達を用意してくれたからだ

「いやいや、此方も多少はお主の原因でもあるわけじゃからな……
じゃが、世界については悪かったの。アポローンには後でキツチリ
言っておくからの」

（ゼウス神様、マジでありがとうございます）

俺は心の中で感謝した

「んじゃ、この扉を潜つたら《ネギま!》の世界へ行くからの」

ゼウス神様がそう言うのと、ゼウス神様の隣にはいつの間にか扉があった

あつたのはいいのだが…

「これは、某青狸のd「気のせいじゃよ」いや、絶対にどk「気のせいじゃ」……d「気のせいじゃ」わ、分かりました、分かりましたから…」

ゼウス神様、頼むから顔を近づけないでくれ
迫力が在りすぎる…

「…んじゃ、御世話になりました」

俺は感謝の意味を込めてゼウス神様やアルテミス、天使に頭を下げた

「……………い（ボソボソ）」

ん？今、アルテミスはなんて言ったんだ？

「…行つてらっしゃい（ボソボソ）」

アルテミスさんや、最後の方が聞こえないのですが……まあいいや。
にしても、行つてらっしゃい、か…
んじゃ、俺は…

「…行つて来ます」

聞こえるか聞こえない位の声でアルテミスに言った

「!?!?!?!え、ええ／＼／」

何故かアルテミスが顔を紅くしてたが……まあ、俺も少し恥ずかしかったが…

そして俺は、某青たn「霧夜君や、気のせいじゃと言った筈じゃが?」俺は扉を潜った…

SIDE OUT

【第壹話】時が来た…だけど移動手段が（汗）（後書き）

というわけで、霧夜が異世界入りしました！

霧夜「明らかにどk」その先は言うては駄目です！！」黙れ幼女」

天使「また幼女って！？」

???「天ちゃん、大丈夫かしら？」

天使「アルテミス様」（泣）」

げっ、アルテミス…

アルテミス「霧夜君、この後お願い出来る？」

霧夜「なんで俺が…雨季さん、竜華零さん、ユタさん、十六夜ア
ミナさん、けーくんさん、fakuさん、nosugarさん、秋
代さん、時空の旅人さん、感想ありがとうございます」

アルテミス「次回は…と言っても、今日中に後2話上げるんだった
わよね？」

これだからアルテミスは嫌なんだ（泣）

霧夜「勝手に嫌いになったのはお前だろうが…」

天使「では、次回もよろしくお願いします」

【第貳話】拾われた…（前書き）

本日2話目です!!

天使「では、本編をご覧ください!」

【第貳話】拾われた…

霧夜SIDE

無事(?)　ネギま！　の世界に着いた俺、霧夜ですが……着いた瞬間、何故か体が8歳になった
更に8歳になって少し後、なにかに追われ始めた
俺を追って来ているのは……悪魔だった
とりあえず悪魔が俺を追って来ている理由に耳を傾けてみると…

「あの村の生き残りだ！　さっきと捕まえて食うぞ!!」

「『オオー!!』」

どうやら悪魔達は俺を食うつもりらしい……てか、多分俺を食っても旨くねえと思うぞ!?

それにこいつら……この近くにあるどっかの村を1つ潰してやがる…!?

果てには、俺を潰してきた村の生き残りと勘違いしていると……ふざけんな(泣)すると突然…

「『ギヤアアアアア!!』」

悪魔達の叫び声が聞こえて来たから、俺は急いで後ろを振り返ったそこには…

「食らいな!千の雷!!」

なんか手帳を読みながら悪魔に向かって魔法ブツ放ってる人がいた

……って、あの人は!?

(まさか、ナギ!?……なら、今は薬味坊主の前の時代か!?)

転生(?)した時代に対して思いつきし驚きつつも、何故か鬱になりそうな気分だった

理由こそ、個人的な理由。そう、実は俺…

ナギが主人公の時代の登場人物や使う魔法や技は大体で分かるのに、時代の流れだけが全く分かんねんだよ!!!!!!

そんな時、身長の小さい人が段々俺に近づいて来て……って

(この人、ナギの師匠のゼクトさん!?)

俺が内心驚いていると、ゼクト(?)さんが俺に話し掛けてきた

「小僧、大丈夫じゃったかの?」

「えっ、あっ、はい!」

俺が慌てて答えると、ゼクトさんは「そうか」と言い、自身の後ろを見た

ゼクトさんの後ろでは既に悪魔達（と、一部の大地）が居なくなっていた…

こうして俺は『紅き翼』^{アラルツラ}と出逢い、何故かゼクトさんの養子となつた……つつか、なんでゼクトさんの養子になつてるんだ？俺（汗）

【第貳話】拾われた…（後書き）

このままもう1つ更新しますので、後書きはスルーします

【キャラ設定・主人公編】今頃ですがね…（前書き）

というわけで、キャラ設定です

アルテミス」どうぞ」

【キャラ設定・主人公編】今頃ですがね…

《転生前》

名前：遠坂霧夜

（とおさかきりや）

年齢：16歳

《世界介入後》

名前：キリヤ・ゼクト

年齢：8歳

《特徴》

髪色：黒色

髪型：ロング

瞳の色：群青色

《服装》

FF？のアーロンさんの色違い（黒色）

《説明》

歩道を歩いてたら、居眠り運転していた相手の自動車にぶつけられて死んだ

本来なら転ブレとは無縁で、そのまま天国か地獄に逝く筈だったが、何故か心臓にあったアインスト（ペルゼイン・リヒカイト）のコアのせいで形だけの転生者になった

その際、アルテミスから師匠を何人が強制的に付けられ、修行をした後、『ネギま！』の世界へ旅立った

そして『ネギま！』の世界に来たが、近くの村を襲っていた悪魔達に狙われた

その時、偶々ナギ達に助けてもらい、そのまま何故かゼクトの養子になった

《武装》

・鬼蓮華 & 鬼菩薩

原作（無限のフロンティアEXCEED）でアルフィミイが使っていたのと同じ物

使いたい時に姿を現す

《能力》

・アインスト化

そのまんまペルゼイン・リヒカイトになる
体もアインストそのもの

・魔術、魔法関連

余程の緊急時以外は使わない為、執筆無し

・身体能力関連

及第点故に、師匠達レベルの転生者達程強くは無い……が、本来な

ら並の転生者には恐らく互角レベル

《師匠》

・南武貴史&カスミ・ヴェネーラ&近衛薫

「チート最高、最強、無敵、無敗、更に原作ブレイク確実上等！！」
な作品、『三人の転生者』の主人公メンバー

作者は秋代様です」

・一条要

「神様にアニメ世界に飛ばされ、型月最強 O R T の力等のチート能力で暴れ回る『チートじゃ済まないシリーズ』の主人公

現在は『チートじゃ済まないin星海』で活躍中

作者は雨季様です」

・霧雨霞

「主人公^{ヒロイン} になることを求める、一人の少女の人生の軌跡を描く物語

現在は【唯一神】シリーズの『唯一神を継ぐもの シャナなう』で活躍中

作者は葵（仮）様です」

【キャラ設定・主人公編】今頃ですがね…（後書き）

とりあえず、本日の更新は終わら「まだ更新やるよな？」…はい？

霧夜「この勢いでもう1話更新しろよ」

天使「更新しましょう！」

アルテミス「更新しなさい」

…出来たります（泣）

天使「アルテミス様、お願いします」

アルテミス「時空の旅人さん、秋代さん、感想ありがとう」

霧夜「んじゃ、次回も」

天使「よろしくお願いします」

【第参話】鬼畜眼鏡め…そして馬鹿到来（前書き）

一体今日だけで何回更新するのだろうか…

霧夜「ちなみに4回目だな」

天使「では、本編をどうぞ」

【第参話】鬼畜眼鏡め…そして馬鹿到来

霧夜SIDE

悪魔達に追われた日から数日が経った

ここ数日で現在の紅き翼のメンバーとは随分仲良くなれた

ちなみに、俺が実は身体の中に異形がいるとか（転生者ということ以外）全て話してしまった

しかし…

「んなもん、関係ねえよ。お前はお前だろ？」

とナギさんが俺に言った

その時、俺は思わず大泣した

まあ、これ以上は恥ずいから言わないとして…

メンバーの紹介をしながら色々と言っていく

まずは、ナギ・スプリングフィールド…ナギさんとは何故かノリが合って、偶に色々馬鹿な事を一緒にやってる（だが俺は8歳…）

青山詠春…あおやま えいしゅん

詠春さんは、俺が神鳴流しんめいりゅうの技が使えると知ってからは色んな技やアドバイスをくれるようになった

それに、師匠達より若干レベルが低いがアドバイスをくれる為、技の微調整や自分に合う風に改良とか出来るから随分楽だ

それに、俺が成長していく姿が楽しましい

アルビレオ・イマ…アルさんは最初会った時、俺を少女と勘違いしたから思わず鬼蓮華で斬り掛かるうとしてしまった。反省もして

ないし、後悔もしてない

俺が転生者と分かってからも、色々と面倒を掛けてくれる
最近は俺に魔法の応用を教えてくれる

そして最後はフィリウス・ゼクト……ゼクトさん曰く、俺を養子に
してくれた理由は「なんとなく」なんだそうだ
なんとなくで養子にしてくれたって……ちょっと複雑な気分になる
のは気のせいなのか？

ちなみに、俺がゼクトさんと呼ぶ時は…

「ゼクト父さん」

と呼んでいる

理由は……まあ、俺もなんとなくだ

さて、今は晩飯時

詠春さんが晩飯作ってて、俺はナギさんとゼクト父さんの2人と修
行中

アルさんは愉快そうに俺等3人を見てる
しかし、修行中の内容は…

「ちよっ、ナギさん！？マジで千の雷は止めて!!」

「キリヤなら大丈夫だ!」

「その自信は一体どっから!？」

そっ、普通に千の雷等の上級魔法がドカドカと放たれているのだ

千の雷は未だに相殺とか無理だから、回避しなければいけない
そんな時、ゼクト父さんがナギさんに近づき…

「ナギ、いい加減キリヤにそんな馬鹿魔法を撃つんじゃない」

「ちえ……師匠がそう言うなら仕方ないな…」

とゼクト父さんがナギさんに注意してくれた
ゼクト父さん、ありがとう…

「さて……キリヤ君、私とちょっと勝負しよう」

俺がゼクト父さんの言葉で惚けていると、詠春さんがいきなり俺に
言ってきた

「ところで詠春さん、晩飯は大丈夫なのか？」

「アルが代わりに見てるからね」

さ、際ですか…（汗）

俺は鬼蓮華を出すと、鞘から鬼蓮華を抜く
8歳の身体になったせいで腰に鬼蓮華を身に付けることが出来ない

から、代わりに鬼蓮華を出すという応急措置をしてる
それに……片手で持てた筈の鬼蓮華が、今は両手じゃ無いと無理な
んだよな……

「では、いくよ!」

詠春さんが俺に声を掛けた後、一瞬で近づいて来るが、俺はすぐに
避ける
しかし……

「 神鳴流奥義 斬岩剣!^{ざんがんけん}!」

詠春さんは俺に斬岩剣を放ってきた
俺は慌てて緊急回避をする

「ちよつ、それ奥義!?!」

「キリヤ君なら大丈夫だろうと思ってね」

(この痩せ眼鏡……鬼畜だな。なら俺も……)

俺はそう思うと、自分から詠春さんに近づき……

「 斬岩剣!!!」

斬岩剣を詠春さんに放つ

「ッ!?!」

詠春さんは俺が放った斬岩剣を驚きながらも、余裕で避けた

ちなみに言っておくが、俺は斬岩剣だけで終わるつもりは無いんだな、これが!!

「ざんくうせん
斬空閃!!」

俺は先程放った斬岩剣の状態から斬空剣を詠春さんに放ったそれに対し、詠春さんは…

「神鳴流奥義 斬空閃!」

斬空閃を放って、相殺させてきた
そして、俺の放った斬空剣と詠春さんの放った斬空剣がぶつかり、見事相殺された。更に相殺によって砂煙が起き、俺は砂煙を利用して詠春さんに近づいて…

「ひゃくれつおうかざん
百烈桜華斬!!」

俺が神鳴流の中で一番得意を放とうとした
しかし、8歳の身体故だろう……放つ直前に俺はその場で倒れた
8歳の身体では、百烈桜華斬の反動に耐えきれない
おそらくそれが原因

「危なかった…」

詠春さんがそう言っただけを俺をおんぶしてくれる

「いつもすみません…」

「いいよ、8歳であそけまで動けるんだ。こうなる事は当たり前だ」

詠春さんの言葉に、俺は頷くことしか出来なかった…

「（アルテミス……また会ったら覚えてるよ……）ところで詠春さん……今日の晩飯はなんですか？」

「今日は鍋料理だ」

鍋か……そういや、魔法世界の鍋って旨いのか？

「日本の鍋料理って奴かぁ……じゃ、早速肉を」

「あつ！ナギ、おまつ……何肉を先に入れてるんだよ」

「トカゲ肉でも旨いのかのう？」

「この肉、トカゲ肉なんだ……」

今は皆で鍋料理を食べてるんだが……ナギさんが早速肉を入れたそれを詠春さんが怒って、ゼスト父さんは肉が旨いかどうか聞く俺はゼスト父さんの言葉を聞いてちよつと鬱に入り、アルさんは何故か笑顔で傍観してる

「いいじゃねえか、旨いもんから先だよ。ホラホラ」

ナギさんがそう言って、どんどんトカゲ肉を鍋に入れていくそれを見た詠春さんがナギさんに注意する

「ところでゼスト父さん……トカゲ肉って旨いの？」

「旨いのう……まあ、この鍋料理でも旨いかどうかは分かんがのう」

見た目は普通の肉にしか見えないのに、実はトカゲの肉とか……ちよつとだけ抵抗があるな
すると、アルさんが微笑しながら言った

「フフ……詠春、知っていますよ。日本では貴方のような者を 鍋 將軍 ……と呼び習わすそうですね」

「つ……強そうじゃな」

いや、鍋將軍じゃなくて鍋奉行だから（汗）
そしてゼスト父さん信じちゃった！？

「わかったよ……詠春、俺の負けだ。今日からお前が鍋將軍だ」

「全て任す、好きにするが良い」

「んー……嬉しくないなー。そして鍋將軍ではなく鍋奉行だ」

どうやらナギさんも信じたみたいだ……それに対して詠春さんがちやんと訂正してる……だけど、ちよつと俺は悪乗りしてみたくなった

「頑張ってください……詠春鍋將軍」

「だから鍋將軍ではなく鍋奉行……霧夜君、わざとらしいぞ」

俺の言葉に詠春さんが溜息をつきながら反論した

何故だろうか……詠春さんを弄るのが楽しく思えてきたのは…

「何故キリヤ君は幼女に見えるのでしょうか…」

「アルさん、俺は女子じゃなく男子だ」

アルさんの一言で思わず鬼蓮華と鬼菩薩を出しそうになった…
危ない危ない

「思い出しました。確か、キリヤ君のような者を日本では確か……
そう、男の娘 と呼び習わす筈……でしたよね？ 詠春」

「何故俺に振るんだ？」

俺も何故 男の娘 と言われるのかが不思議な位なんだが……てか、
俺が勝手に男の娘にされていく……そんなに俺って、女顔なんだろうか……？

アルテミス様の転生特典です by天使

今なんか色々と苛ついたから、とりあえずアルさんを後で殴ることを決めた

そんな時、ナギさんが肉を食べながら呟いた

「…姫子ちゃんにも食わしてやりたいくらいの旨さだな」

「姫子ちゃ…？ ああ、オスティアの姫御子のことじゃな？」

ナギさんとゼクト父さんの言葉で疑問が1つ
オスティアの姫御子って……誰だったわけ？

「…そういえば、キリヤ君はオスティアの姫御子等を知ってますか？」

「全く知りません」

この場合は忘れたと言つべきなのかとつい迷つてしまった

「では、教えてあげましょう。まずはオスティアの姫御子……アスナ・ウエスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシアという……」

「…というわけなんですよ」

「へえ」

アルさんの説明が終わり、（長かったから略すが……）なんとというか…… 凄いんだな、オスティアの姫御子って

「まあ……戦が終われば、彼女を自由にする機会も掴めるやも……ですな」

アルさんの説明が終わった直後、詠春さんが椎茸（だと思つ食べ物）を食べながら言った

「その戦だが……やはり、どうにも不自然に思えてならん」

「何が（ですか）？」

俺とナギさんが同時に訊くと、詠春さんは「何もかもだよ」と答えた
その時、ナギさんとアルさんとゼスト父さんが突然動き、肉を取り
始めた

俺と詠春さんがポカンとしていると、鍋に向かつてなにかが飛んで
来て、鍋はなにかに当たり、宙を舞って、詠春さんの頭に落ちた

「食事中失礼ッ……俺は放浪の傭兵剣士、ジャック・ラカン！！
いっちょやろうぜッ」

俺はその時思った…

（…馬鹿が来たよ（汗））

SIDE OUT

【第参話】 鬼畜眼鏡め…そして馬鹿到来（後書き）

とりあえず馬鹿襲来までをお送りしました

霧夜「俺は男の娘じゃない!!」

アルテミス「その発言を拒絶する!」

こいつらが面倒になってきたな…

天使「秋代様、竜華零様、時空の旅人様、雨季様、感想ありがとうございます」

霧夜「次回更新は…」

未定です

霧夜「斬るぞ?」

アルテミス「射ぬくわよ?」

天使「潰しますよ?」

天使が男性にとって一番怖い台詞言ってる…

アルテミス「じゃあ、次回もよろしくね」

【第肆話】 の恨みに注意報……いや、既に警報レベルかw（前書き）

題名の には幾つか入りますが、それは皆さんのご想像にお任せ
します

霧夜「最悪だな」

アルテミス「残念ね」

うるせー（泣）

天使「では、本編をどうぞ」

【第肆話】

の恨みに注意報……いや、既に警報レベルかw

????SIDE

依頼されて3人の男と1人のガキの計4人を襲撃してみたんだがよ……なんか、ガキ1人増えてないか？

しかも、外見からしてロリ少女かよ……まあ、とりあえず……あの少女も対象ターゲットってことでいいんだよな？

……んじゃ、さつさと片付けるか！

この放浪の傭兵剣士、ジャック・ラカンがよ！！

SIDEOUT

霧夜SIDE

ジャック・ラカン……確か、千の刃のラカンって異名を持つ傭兵剣士で、他にも 死なない男、不死身バカ、つかあのおっさん剣が刺さんねーんだけどマジで等、数多の異名を持つてるバグキヤラ……だよな？
というか、その前に……

「え、詠春さん……？」

「フ……フフフ……」

ジャック・ラカンによって宙を舞った鍋が未だに詠春さんの頭にあるからだ

更に、詠春さんから黒いなにかが見える気がする…

「えいしゅ……プッ!？」

ナギさん!？今笑ったら色々ヤバいつて!!

「フ……食べ物で粗末にする者は……」

あつ、今なんか切れた感じの音がしたような…

「どーしたー来ねーのかぁー」

ジャック・ラカンが叫ぶのと同時に、詠春さんの姿が消えた

「来ねーならこっちからいッ……」

ジャック・ラカンの方を見ると、ジャック・ラカンの持っていた剣を真つ二つにした詠春さんがいつの間にか居た

「キリヤ君、一緒にお肉食べながら観戦しませんか？」

見ると、ナギさんとゼクト父さんも観戦していた……肉を食べながら俺は…

「…いただきます」

SIDE OUT

三人称SIDE

ラカンが折られた（もとい斬られた）剣で詠春と相手をしていた

「ちよっ、タンマタンマ。あんたマジでつええな……ちよい待たね？」

「ふざけるなっ、やる気なら本気を出せ貴様！」

その頃、観戦組（？）はというと…

「お？詠春の攻撃凄いでるぜ」

「あの大男、やりますよ。見たことがあります。ちよっと前、南で話題になった剣闘士ですよ」

「なるほどのう……キリヤ、この肉をやるっ」

「あっ、ありがとう。ゼクト父さん」

普通に肉を食べながら2人を見ていた…

「へっ、ソースか……けど、5対1だし、本気出す訳にはいかんのよね」

ラカンはそう言って、4つのカプセルを取り出した
そして…

「あんた達の情報はリサーチ済みだぜっ!？」

4つのカプセルを詠春に向けて投げた
すると、カプセルから4人の女性が現れた…

女性が現れた時、観戦組はというと…

「おいおい…」

「……………」

「アルさん、何故俺を見るんだ？」

「いや、やはりキリヤ君はようぞ」「違うから!？」……………まあ、いい
でしょう」

「良くないから!？」

既に肉を食べ終わっていて、観戦しながらふざけてあっていた…

SIDE OUT

ラカンSIDE

「ホイ、一丁あがり」

《情報その1》……………生真面目剣士はお色気に弱い。情報通りだな

そんな時、嫌な予感がしたから避けてみた
すると、俺がさっきまで居た場所にデケエ魔法が落ちた

「おう、出たな《情報その4》……赤毛の魔法使いは弱点なし。特徴《無敵》」

杖を持っていた小僧は俺を見ながら他の奴等に言った

「てめえら……手エ出すなよ」

すると、他の奴等は…

「言われずとも」

「バカの相手はバカにさせるのが一番じゃ」

「けど、詠春さんは回収するから。アルさん、手伝って」

と言って、《情報1》を回収して空に上がった

「へっ、おっさん。いいのかよ、剣なしで」

「心配すんな。俺は素手のが強え」

俺と小僧は同時に動き出した

SIDE OUT

霧夜SIDE

ナギさんとジャック・ラカンが戦い始めて13時間後……正直に言わせてもらおうと

「あんたら環境破壊し過ぎなんだよ!!」

「ちょっとマジになりすぎたな」

地形が無茶苦茶変わり過ぎて、あまり原型留めてないんだが……てか、何故2人ともハモってんだよ!?

「よし、俺も紅き翼に入るぜ!ナギ・スプリングフィールド!!」

「おうよ!筋肉ダルマあ!!」

ナギさんとジャック・ラカンが互いに笑顔で拳をぶつけたなんでもいいが、なんか頭が痛いんだが…

「…とりあえずアルさん、俺の髪に触ってなにをしよう?」

「いえ、ちょっとキリヤの髪でツインテールを…」

もう勝手にしろよ…

勿論、後でちゃんと元に戻すがな…

SIDE OUT

の恨みに注意報……いや、既に警報レベルかW（後書き）

霧夜「竜華零さん、時空の旅人さん、感想ありがとうな」

霧夜「ちよっ！？こいつらどう対処すんだよ！？」

これを装備して頑張れ！

霧夜一時退場

天使「お客様：ですか？」

アルテミス、紹介よろ

アルテミス「了解。霧夜君の師匠の1人の、カスミ・ヴェネーラ御姉様よ！」

カスミ「なにやら若干凄い紹介をされた気がするが……真祖の吸血鬼、カスミ・ヴェネーラだ」

作者は秋代さんで、作品名は『三人の転生者』です

カスミ「ところで……馬鹿弟子はどうした？」

霧夜は今…

霧夜「殲滅完了っと。にしても、意外にこの剣使えるな。畏無、本編でも使わせ」……って、カスミ師匠!？」

あつ、帰ってきた

カスミ「馬鹿弟子、ちょっと来い」

霧夜「えっ？」

カスミ&霧夜退場

天使「…では、次回もよろしく願いします」

アルテミス「まったね」

元気だな、オイ（汗）

まあ…剣については考えておくか

キィ…

〔説教部屋の扉が開く音〕

カスミ「お前さー、年齢身長が下がっても悪魔とか千の雷とか神鳴流に勝てよ」

霧夜「えっ、あっ、す、すみま」

カスミ「すみませんで通ったらメガ口な老害は要らないんだよ」

霧夜「はい……」

カスミ「お前、誰の弟子だよ」

霧夜「か、カスミ師匠達の」

カスミ「だよな…」

パタン…

〔説教部屋の扉が閉じる音〕

この後、誰も霧夜の姿を暫くは見なかったそうなの…

天使「以後、霧夜さんがこうなる場合は『霧夜のお師匠様達による説教部屋』というコーナーになります」

【第伍話】イレギュラーとの初戦闘（前書き）

題名通りです！

霧夜「んじゃ、本編スタートってことで」

【第伍話】イレギュラーとの初戦闘

霧夜SIDE

ラカンさん（俺が男と知って驚いていたが…）を仲間に加えた紅き翼は一緒にある村に着いた

この村に1日泊まっていくんだそうだ

俺はゼクト父さんと一緒に昼飯を食べた後、村の中ではなく外を散歩していた

「なんか、静かっていいな」「きゃあああああ」…俺の静かな時間が（泣）」

俺は悲鳴が聞こえた場所に向かった…

着いたら変な女性が一人だけ立っていた

「…？」

俺が不思議そうに女性を見ると、女性はいきなり俺に向かって火の玉を放ってきた

「んなつ！？」

俺は急いで鬼蓮華を出し、鞘ごと火の玉を斬った

「へえー、やるじゃない。私のファイアを鞘ごと斬るなんて………そして、私がわざわざ 叫んだ声に反応してくれてありがとう」

色々ツツコミを入れたいのだが……とりあえず、あの叫び声が畏だつたというのは理解した
しかし……ファイアだと？
ちよつと待てや、ファイアってまさか……それに、その髪形や髪の色……

「あんた……何者だ」

「私？　今から殺す相手に名乗るつもりは全く無いわよ！！」

女性はどこからかとてもなく長い刀を出して右手に持つと、そのまま向かって来た

俺は鬼蓮華を抜刀し、女性の刀を防いだ

「てかその刀……まさか、村宗か！？」

村宗……某最後の幻想の7番目に出てくるキャラが使っていた、とてもなく長い刀の武器
そして、そのキャラの名前は……

「あんたのその姿……『セフィロス』の姿とそっくりだな！！」

「私はセフィロス様の姿と力、そして全てのマテリアの力を得た……貴方を殺す遣いよ！！」

セフィロスの姿をした女性（恐らく転生者）はそう言うと、俺から一度距離を置き、左手を突き出した

「召喚獣……召喚！　バハムート　！！」

女性を言ったのと同時に世界が変わり、竜巻がそこらじゅうに起きている世界になった

そして、その世界の中心と思われる場所に、黒い龍が居た

「マジかよ……てか、バハムートって…」

俺、どうやっても勝てる気がしない……と思えない
今の身体じゃ、完全に技に着いていけない……だが、アレになればなんとかなるか

「さて、どうすっかな…」

「どうするもなにも、貴方は死ぬだけよ！」

女性がそう言っつて村宗を振りかざしてきた

俺は避けた後、女性に斬り掛かろうとするが、バハムートの尻尾が俺に向かって来たから、慌てて避ける

（一人でこれはちょいキツいな……アレになる為の時間が掛かるから……）

俺が女性とバハムートの対処に困っていると…

「よお、元気か？キリヤ」

…何故か隣にラカンさんが居た

「って、なんでラカンさん居るの！？」

「とりあえずあのデカイ奴は任せろ！」

ラカンさんはそう言うと、バハムートに向かって言った
いや、だからなんであんな居んだよ!?

…まあ、いいや

「ハア……んじゃ勝負といこうぜ……」『偽セフィロスサンヨオ』

俺は自身の身体に眠っている異形……ペルセインに姿を変え、女性
に鬼蓮華の刃先を向けた

SIDE OUT

三人称SIDE

「それが貴方の正体……つてところかしら？」

女性がペルセイン化した霧夜に聞く

『ナニガ正体ダヨ、全ク……サテット、ソロソロ始メルカ』

霧夜は女性の問いに答えると、鬼蓮華を左手に持った鞘に収めた

「あら、せっかく抜いたのに、しまっちゃうの？」

『無駄口開ク暇ガアルンダッタラ、早く掛カッテ来イヨ』

女性は霧夜の挑発的な態度に笑みを浮かべながら、マテリアの力を

発動した

「なら、遠慮無くやらせてもらっわよ？
アビリティ
能力……えんきよりこうげき、セツト！」

女性は告げた後、その場から移動せずに村宗を霧夜に向けて振った
すると、女性から斬撃が霧夜に向かって飛んできた
しかし、霧夜は慌てずに鬼蓮華を構え…

『神鳴流・抜刀しんめいりゅう・つ・はノ型 斬空閃せんくうせん！！』

抜刀で斬撃を放ち、女性が放った斬撃と相殺させた

「（神鳴流の抜刀術！？）…どうやら、そう簡単には殺せないよう
ね。……それなら、此方は能力追加……れんぞくぎり、セツト！」

女性は更にマテリアの能力を発動させると、再び斬撃を放ってきた
先程の斬撃と違い、1振りで何十もの斬撃が飛んできた
それを見た霧夜は抜刀の構えをせずに、女性に向かって抜刀したま
ま移動を始めた
そして…

『神鳴流ノ奥義ノ改造版ニシテ、俺ノアレンジ技！
きがりゅう・さんげきのかた
鬼牙流・斬撃ノ型 千慄桜華ノ舞！！』

舞を描くように鬼蓮華を振るい、鬼蓮華から出てきた斬撃が全て一
度に斬る様に女性の放ってきた斬撃を斬るが、それで終わらずに、
そのまま女性に向かって斬撃が飛んでいった
それに対し女性は、霧夜の放った斬撃を村宗で対処し始めた

「思つて……たい……じょうに、多い……わね……！」

『アンタハ確力ニ強イカモシレン……ダガナ、師匠達ニ比ベタラ有象無象ノ雑魚ニ過ギナインダヨ……！』

「いつの間に……！」

女性が対処している間に霧夜が女性の目の前に来ていた

『コレデ終ワリダ……イケ、鬼菩薩』

霧夜が言つと、霧夜の両肩辺りに浮かんでいた鬼菩薩が鬼蓮華の様な刀を持ったアインストとなつて、女性を刺した
それと同時に霧夜と女性の周りがモノクロの風景に変わり……

「ぐっ……！」

『きがりゅう 鬼牙流 まがいえくり 眩忌獲愚璃』

霧夜は鬼菩薩が刺した女性を鬼蓮華で突き刺し、何度も抉り始めたしかし、女性は抉られていることに気付いていない……いや、気付けない
何故なら、モノクロの風景の中では時間が止まっているからだ
だから、女性は自分が鬼菩薩に刺されたことしか知らないのだ
そして……

『コレニテ終幕……』

眩きながら鬼蓮華を引き抜いた
それと同時に女性から血のような飛沫が迸る

地面に女性が使っていた村宗が落ちていた

「…せつかくだし、拾ってくか」

霧夜は村宗を拾うと、ちょっとだけ急いでラカンのところに向かった…

SIDE OUT

アルテミスSIDE

「それはちょっと…いいえ、だいぶヤバいわね…」

アポローン兄様の部下の外見が犬な天使（名前は湾子君）からきた連絡を聞いて頭を痛くした

まさか、こんなことが起きるとは予想外だわ…

「湾子君、悠は動けないのかしら？」

「悠様は今、ネイカ様からの頼みで違う世界に出張してます」

ネイカの頼みの出張って…まさか、他世界の神々のところ！？
こんな時に!？

「仕方ないわね…誰か、悠の代わりに動ける転生者は居ないの？」

「例のペルセイン転生者しか今のところ…」

この世界の天界では、霧夜君を知らない天使や神々は彼を ペルセイン転生者 と呼ぶの（私と天ちゃん、ゼウス爺様とアポローン兄様が今のところ普通に名前で呼んでるわね）

「…悪いけど、霧夜君を呼び寄せるしか無いわね」

「では、早急に」

霧夜君には、本当に悪いわね……けど、必ずなんとかしないとけない……例えその世界が 原作に極めて近く、そして限りなく遠い世界 であつたとしても…

SIDE OUT

天使「どうも、天使です。今回からは本編で登場した技等を中心に私が紹介していく『天使ちゃん発表会』が度々あるので、よろしくお願いします。第1回目の紹介は此方です」

鬼牙流
きがりゅう

霧夜が元々ある流儀の技等を自分流にアレンジや改良（もとい改造）した流儀

千慄桜華ノ舞 せんりつおうかのまい

正式名称「鬼牙流・斬撃ノ型 千慄桜華ノ舞」

神鳴流の技の1つである百烈桜華斬 ひゃくれつおうかざんを鬼牙流に改造した技で、その動きはまるで舞を踊っている様な動きだが、動きの中で千もの斬撃を放っている

眩忌獲愚璃 まぶいえくり

正式名称「鬼牙流 眩忌獲愚璃」

スパロボ でペルセイン等が使っていた技を霧夜がアレンジした技で、元の技の名前はマブイエグリ

鬼菩薩を異形のアイNSTに変化させ、そのアイNSTが持っている刀で相手を刺して拘束（刺したのと同時に風景がモノクロになり、その間は相手の時間は止まる）

その後、拘束した相手を鬼蓮華で突き刺し、何度も決る

そして、鬼蓮華を引き抜くと血のような飛沫（実際に血かどうかは霧夜が決る時の物による）が進り、鬼菩薩も相手から引き抜く

鬼菩薩が引き抜いたすぐ後に、モノクロの風景から元の風景に戻り、相手の時間も動き出す

天使「これにて第1回『天使ちゃん発表会』を終わります。ありがとうございました」

【第伍話】イレギュラーとの初戦闘（後書き）

初イレギュラー戦をお送りしました

霧夜「そして村宗拾った」

拾った後は近所の交番へ！

霧夜「村宗なんて持ってつたら銃刀法違反で即捕まるわ！！」

天使「霧夜さん落ち着いて下さい」

霧夜「黙れ幼女」

天使「私、幼女じゃありません！！」

なんでもいい

アルテミス、よろしく

アルテミス「分かったわ。時空の旅人さん、秋代さん、竜華零さん、SILVERさん、感想ありがとうね。特に秋代さんとSILVERさんには指摘ありがとう」

天使「えっと…時空の旅人様から アカムトルム、ウカムルバス、アルバトリオン、アマツマガツチ の天災クラスの四頭と、 漆黒爪「終焉」（太刀）、主牙剣「折雷」（片手剣）、ウンディーネ（双剣）、セイバートゥース（ランス）、煌銃槍イシュタル（ガンランス） の大量の武器をお土産にいただきました」

アルテミス「ちなみに、アカムトルムとアルバトリオンとアマツマガツチは龍属性が、ウカムルバスは火属性が弱点だそうよ」

というわけで、霧夜どうする？

ただし、武器はいただいた5つの中から限定な？

霧夜「ん……なら」

霧夜（アインスト化）『 ウンディーネ（双剣） ヲ両腰ニ差シテ、
右手ニ 漆黒爪「終焉」（太刀） 、左手ニ 煌銃槍イシユタル（
ガンランス） 、背中ニ セイバートウース（ランス） デヤルカ』

お前、アインスト化に全武器装備ってありなのか？

霧夜『イインジャネ？ ンジャ、俺ハモウ行クカラ』

霧夜一時退場

アルテミス「勝敗の結果は次回の後書きにて発表するわ」

では、次回もよろしくお願いします！

【第陸話】神の遣いと…（前書き）

いきなりだけど、バカテスの小説やソード・アート・オンライン（S・A・O）が読みたい

霧夜「黙って執筆をしろ」

ちよつと息抜きに…

霧夜「なんか言ったか？」

「（・・・）」

霧夜「逃げんなよ!？」

（違う!これは戦略的撤退だ!!）
（;）!!

霧夜「嘘を言うな!!」

天使「皆さんは作者みたいならずに、ちゃんと息抜きをしながら執筆や学業、仕事等を頑張ってください。では、本編スタートです」

【第陸話】神の遣いと…

霧夜SIDE

あの転生者の女性と戦った後、ラカンさんを迎えに行ったら何故かバハムートを手懐けたラカンさんが居た

「いや、なんで手懐けてんの!？」

「なんでだろうな？」

いや、俺に訊かれても…

「とりあえずこいつどうすればいいんだ？」

いや、だから俺に訊かれてもさ…

「とりあえずマテリアに戻します」

「マテリアってなんだ？」

ですよ〜

さて、俺がなんとかするかな…

霧夜奮闘中・・・

バハムートのマテリア化に無事成功した……てか

「なんでラカンさんの言うことしか実行してねえんだよ……」

そう、ラカンさんがバハムートに「戻れ」って言ったら、バハムートが自分からマテリア化したんだよ…

「とりあえず、それは一応俺が預かります」

「分かったぜ。 ほらよ……受け取れ!!」

マテリアを投球ポーズで投げるな!!

バハムートのマテリアを受け取った俺はラカンさんに口止めを頼み、一緒に村へ帰って来た
すると、アルさんがなにかを抱きながら俺に近づいて来た

「アルさん、なにを抱いてるの？」

「喋る犬です」

…はあ？

遂にアルさん、現実逃避まで始めたのか？

「いえ、正確には 神の遣い と名乗った喋る犬ですがね」

神の遣い？

てか、犬型の悪魔じゃないのか？それ

「悪魔ではありませんよ、ペルセイン転生者」

「ほら、ね？」

…ちょっと待てや

「アルさん、ちょっとその犬貸して」

「どうぞ」

俺はアルさんから犬を借りると、犬に訊いた

「お前、何者だよ」

「自分はアポロン様の部下を務めていまして、名前は灣子と申します。今日は貴方へ早急に伝達しなければならなかったのがあつたので、伝えに来ました。ペルセイン転生者」

なんでもいいが、ペルセイン転生者ってなんだよ……いや、俺のこ
とって分かるけどさ…

「では、今から天界へ「ちょい待ち」なんですか？」

この犬、自分勝手に話進めやがって…

「とりあえず、天界に行くってのは理解したから、ちょい待て」

「…分かりました」

俺は犬を地面に降ろすと、アルさんに訊く

「アルさん、ちょっといいです」「いいですよ」「早っ!？」

「話は全て聴きましたからね。ですが、一つだけ約束を……必ず、
戻って来て下さいね？」

「!?!?……はい!?!」

俺はアルさんと話終わった後、犬によって天界へ転位した…

SIDE OUT

アルビレオSIDE

キリヤ君が喋る犬と一緒に魔法とは違う何かで目の前から転位しま

した

一体どうやって等色々疑問がありました、恐らくキリヤ君が前に私達に話してくれた話の中に出ていた 神 に関連する力での転位だと私は思います

私はあの時、キリヤ君の話をあまり信じていませんでした

なにせ神とか色々出てきましたから

ですが、今なら信じられますね

何故ならキリヤ君は……私達 紅き翼の仲間なんですから

「…行ってらっしゃい、キリヤ君」

さて、ナギ達にキリヤ君のことを話さなければ……

SIDE OUT

霧夜SIDE

「
…
んでだ、
犬」

「湾子です」

湾子でも犬でも別にどうだっていいんだが……何故俺は先程から吊り下げられてるんだよ!?

「アルテミス様の命令ですから」

アアアアアアアアルテミスウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ！！！！

「呼んだ？」

もう神なんか嫌いだ……こんちくしょう（泣）

「…んで、なんの用だよ」

「そんなふてくされた顔しないでよ……とりあえず、まずは用件を話すわね。霧夜君、貴方にはある世界にちょっと介入してもらいたいのよ」

ある世界ってどこだよ……てか、介入してもらいたいってどういうことだよ？

「実はね、その世界には霧夜君の師匠達に深く関わりのある人物がいるんだけどね？」

師匠達に深く関わりのある人物だと？

「だけど、その人物の物語を破壊する為に、ある馬鹿な天使がイレギュラーを何人か介入させたの。まあ、その天使は罰として冥界送りにしたけど」

馬鹿な天使は既に冥界送りって……てか、物語を破壊する為にイレギュラー！？

「そのイレギュラーの人数や特徴とか分かるのか？」

「分かるわよ？ えっと……月姫関連1人と、f a t e 関連が3人、F F 関連が1人、モンハン関連が5人、スパロボ関連が2人、犬夜

又関連が2人、限定武器関連が2人、ガンダム関連5人の計21人
「いや、20人だ」えっ？」

俺はアルテミスに先程FF関連の転生者と戦ったことを伝えた

「…つまり、残りは20人ってわけね」

「恐らくだがな」

アルテミスはなにか考えると、黒いポーチを俺に渡してきた

「なんでポーチ？」

「饒別よ。このポーチは、簡単に言えばf a t eの 王の財宝 ゲイト・オブ・バビロン の
様な感じの神器なのよ」

要は某青狸のなんでもポケットのポーチバージョンか

「サンキューな」

「ちなみに、中に武器関連は殆どないから。あるのは貴方が得た
武器とか、その他諸々だけだから」

オイ！？

…まあ、いいか

「んじゃ、行つて来る」

俺はイレギュラーと戦う為に世界へ向かった…

… 筈だった

「何故吊り下げられたままなんだよ!？」

「実h「おゝ吊り下げられてんな」お疲れ様です」

… ちょっと待て

マジか!？マジなのか!？

「んじゃ、第2回『お師匠様達による説教部屋』を始めるか」

「な、何故なのでしょう？（ガクガク）」

「んなもん、さっきの戦闘で分かってんだろ？」

あの戦闘、見てたんだ…

「まあ、初戦で身体が出来上がる前だから無茶苦茶大甘で見て及第点……だが、バハムートを召喚された時点でマイナスだな。他にも色々あるが……要は、総合的にマイナスってわけだ。だから 説教部屋」

「お、お手柔らかにお願いします…」

…貴史師匠」

俺の言葉を聞いて、貴史師匠は…

「だが、断る」

と答えた

その日、天界に1人の少年の叫び声が響いたそうなの…

【第陸話】神の遣いと…（後書き）

霧夜は未だに説教タイム中なので、今回は出ません

天使「霧夜さんも大変ですね」

アルテミス「今回は霧夜君の代わりにこんな人を呼んでみました」

ゼクト「紅き翼所属で、キリヤの父親になったフィリウス・ゼクトじゃ」

まさかのゼクトさんと呼んじやった！？

アルテミス「霧夜君を養子にした感想は？」

俺のことは無視か！？無視なのか！？無視で決まりなんだな！？

ゼクト「何故養子にしたかはあまり話たくないが、養子にして良かったのは確かじゃな。ところでなんじゃが…」

アルテミス「どうしたの？」

ゼスト「あそこでいじけとる作者はなんとかならんかのう？」

アルテミス「そうね…天ちゃん、お願い」

天使「分かりました」

アルテミス「さて…じゃあゼクトさん？これを読んでもらえる？」

ゼスト「うむ、分かった。…秋代さん、十六夜アミナさん、時空の旅人さん、雨季さん、烈火さん、感想ありがとう」

アルテミス「烈火さんは、指摘してくれてありがとう」

ゼスト「それと、なにやらキリヤに贈り物が来とるそうじゃが…」

アルテミス「ああ、時空の旅人さんから送られてきたラオシャンロンね？　だけど、贈り物のラオシャンロン自体が此方に歩いて来るから、次回の後書き辺りに着くらしいわ」

ゼクト「ところで、ラオシャンロンってなんじゃ？」

アルテミス「とりあえず大きな龍よ」

ゼクト「巨大な龍……ヘラス帝国の帝都守護聖獣である龍樹ナーガシャみたいな奴かのう？」

アルテミス「うーん、なんて言えばいいかなー……とにかく巨大な龍」

ゼスト「…まあ、いいじゃろ」

そろそろ時間でーす

ゼスト「復活が早いのう」

天使「弄られるのはもう嫌です…」

天使（幼女）は弄られる存在だからな

天使「だから幼女じゃありません!!」

アルテミス「まあまあ、天ちゃん落ち着いて」

ゼスト「なんじゃかのう……では、次回もよろしく頼んじゃぞ」

アルテミス「それと、前回の後書きで霧夜君が アカムトルム、ウカムルバス、アルバトリオン、アマツマガツチ の天災クラスの四頭と戦った際の勝敗の結果だけど、結果はアカムトルム、ウカムルバス、アルバトリオンは討伐。アマツマガツチだけは霧夜君に懐いたみたいよ」

天使「アマツマガツチは今アポローン様が霧夜さんの代わりに飼っています」

アルテミス「いつかまた後書きで会いそうね…」

天使「ですね…」

【第漆話】 原作に極めて近く……そして、限りなく遠い世界（前書き）

なんと！

お気に入り登録数が20件&PVの累計が10,000アクセスに
到達しました！！

霧夜「嬉しいな……こんな駄作品をお気に入りしてくれて」

お前は素直に喜ぶことが出来んのか！？

天使「前置きはここまでにして……では、本編をどうぞ」

【第漆話】 原作に極めて近く……そして、限りなく遠い世界

霧夜SIDE

『お師匠様達による説教部屋 by 貴史師匠編』を受けた次の日……俺はイレギュラー退治をする為にアルテミスに転位させてもらい、師匠達に深く関わりのあるらしい人物の世界にやってきたやつてきたのは良かったんだが…

「なんちゅう密林だよ…」

何故か密林だらけの場所に俺は居た
辺りを見回しても木々しか見当たらないだけと思つてた時期もありましたよ…

「なんで俺は囲まれてるかな…」

今俺は絶賛動物（つばい生物）達に囲まれてる状況
しかも面倒なことに…

「触手に捕まつた状態だしな…」

手足を触手で縛られてました
そして触手の先には……FFで（おそらく）お馴染みのモボが居た

「いくらなんでも、いきなりこれは酷いっしょ…」

俺はその場でアインスト化した後、浮かんでいた鬼菩薩で俺を縛つ

ガ全クシナインダガ……ン？アレハ？」

密林を抜けた先に、なにか建物が見えた
別に建物が見えたのは全く問題が無い
あるとすれば…

『マサカ、コンナ外ニマデ血ノ匂イガスルナンテナ……テカ、普通
ナラコノ血ノ匂イニ反応シテ、逆ニ生物トカガ少ナカラズ集マツテ
来タリスル筈ダガ…』

そう、だいぶ距離があるのにここまで血の匂いがするのがおかしい
んだよ

しかも、血の匂いはあの建物からみたいだな…
とりあえず、マズいと感じた俺は建物の中に入ることにした…

『酷エナ、コレハ…』

建物に入った俺が目にしたのは真っ赤に染まった廊下、そして……
床に時々落ちているなにかの肉片だった

『コレハ、生き残ッテル奴トカ居ルノカ…？』

その時、肉片の近くにあった通信機から音声が届いてきた

「貴様！ここは管理局の研究s「違法研究してんだろが！知って
んだよ！！」グハッ！？」

「ひ、ひiiiiiiii！？」

「安心しな……てめえもすぐに送ってやるよ！」

グシャリとなにかが潰れた音がした後、先程から喋っていた男と思われる音声が届いてきた

「にしても……本当にこんな所に居るのかよ？ 無限の欲望 っ
のは……」

（ 無限の欲望 ……？ ）

あまり聞いたことの無い単語ではあったが、無茶苦茶嫌な予感がした俺は 無限の欲望 を探す為に急いで建物の奥に進んだ…

暫く建物の奥に進んだ俺は一つだけ真っ白な扉を見つけた
俺はとりあえず扉を開けることにした
扉の先には…

「おや？まさか人間ではないのが来るとは……」

紫色の髪の子供が両手両足を鎖で縛られていた
更に男はとても痩せこけた体をしているから、数日間位この部屋で縛られていたと思う

『アンタ、誰ダヨ？』

「更に喋れるとは……興味深いね」

勝手に興味を持たないで欲しいんだが…

「…ああ、すまない。私の名前はジェイル。ジェイル・スカリエツティだ」

…ちよつと待て、今ジェイル・スカリエツティって名乗ったか！？あのリリカルな魔法世界にある管理局の最高評議会のメンバーの手により、アルなんとかって技術によって造られた異能の天才児な人造生命体で、開発コードネームみたいのが アンリミテッド・デザイア（無限の欲望） って名前のマッドサイエンティストのジェイル・スカリエツティって名乗ったのか！？…ってことは、この世界は リリカルなのは の世界なのかよ！あつ、だからさっきの通信機から管理局って単語が出たのか……完全に無視してたから忘れてたな（汗）
そっついや…

『ナンデ縛ラレテンノ？』

「私のことを知っても何も思わないのかい？」

『知ツタカラツテ、ナンカ問題デモアンノカ？』

俺の言葉を聞いたジェイル・スカリエツティは若干驚いた様な顔をするが、俺はとりあえずジェイル・スカリエツティを縛っていた鎖を鬼蓮華で斬っておいた

「（ブツブツブツブツ…）おや、鎖が…」

『黙ッテ斬ツタガ……良カッタカ？』

「別に構わない……いや、むしろ助かったよ」

ジェイル・スカリエッティはそう言いながら俺を観察する様に見てきた

『勝手ニ観察スルノハ別ニ問題無イカラ、サツサトコンナ場所出ヨウゼ。ココニ来ルマデ殆ド血ヤラ肉片シカ見テナイカラ長居シタクナインダガ…』

なんで鎖で縛られてたとかは、もう後でいいからさ…

「血やら肉片しか？ …確かに、そんな状況のこんな場所に長居は無用だね」

ジェイル・スカリエッティがそう言った直後、後ろにあつた扉が開き…

「やっと見つけたぞ、無限の欲望!!」

『「ん（ん）？」』

俺が振り返ると、全身青色で、肘から剣が出てて、顔がWな髭っぽい奴が居た

まあ、この全身青色野郎は大体なにか分かるんだが…

「なっ、なんでアインストがいんだよ!？」

『ソノ言葉ハソノママ其方ニ返スゾ、イレギュラー』

俺は一瞬で全身青色野郎の首を鬼蓮華で刎ねる
全身青色野郎は何も出来ずにそのまま死んだ

てか、こいつが俺の好きなゲームのお気に入りの機体を使ってるのが苛つく

「おや、さっくり死んだね」

スカリエッティは思った以上に驚いてないようだし…

『怠イカラサツサトコンナ場所カラ出ヨウゼ』

「そうだね」

俺は全身青色野郎の死体をそのままにして、ジェイル・スカリエッティと一緒に研究所を出ることにした…

S I D E O U T

??? S I D E

私はとある世界の密林地帯にあった謎の研究所の近くで戦っていた相手は全身緑色で、両腕に持つてるガトリングを私に向けて撃ってくるけど、それを私は余裕で避ける……だけど、私からは攻撃が来ないのがさつきから歯痒いわね

「思った以上に粘るな…」

「それはどうも!」

全く、単独でこんな事件を調べてたのがヤバかったのかしらね……

調べておいた資料はデバイス（相棒）に預けてあるから、多分老け顔（もとい私の師匠）が見るわね……こんなだったら、もっとあの子と接していれば良かったかしら？

「ここまでだ」

「っ！？ 設置型のバインド！」

相手は設置型のバインドで私を捕まえた後、私の目の前にガトリングの銃口を突き付ける

その時、私は仲間達の顔を思い出した

（ああ、これが走馬灯って奴ね……師匠、クイント、メガーヌ、相棒……亮一、皆……ごめんね……）

私が目をつぶった直後、ガトリングの音が聞こえてきた……

だけど、一向に私にダメージが来ない

私が目を開くと、私の目の前に巨大な岩がいつの間にかあって、私を銃撃から守ってくれているみたいだった……

すると、ガトリングの音が止み、あの男の声が聞こえてきた

「この岩……なんだ？」

男の声が終わった直後、私の目の前にいつの間にかあった岩が突然動き出した

「な、何！？」

私が驚いていると、目の前の岩の下から頭やら翼やらが出てきて、最後に足を出し、目の前にあった岩は岩を背中に背負っている龍種に姿を変えた

「その姿は……」

『^{ぬし}主から感じるこの感覚は……成る程、我と同じくイレギュラーの様じゃな』

「り、龍種が喋った！？」

喋れる龍種って存在してない筈よね？！

まさか、新種の龍種！？

けど……イレギュラーってどういう……？

『人間、そこから動くなよ？』

龍種は私にそう言うと、男に向かって行った…

そして、龍種と男がぶつかる直前…

『ナンデイキナリイレギュラーガコンナ多インダヨ、全ク……』

男のガトリングに刀を刺し、龍種の動きを素手で止めた一体の異形

が現れた…

SIDE OUT

霧夜SIDE

『ナンデイキナリイレギュラーガコンナ多インダヨ、全ク…』

なにやら激突な戦闘をしようとしている両腕にガトリング持ちの緑ガンダムと岩に擬態化するのが得意そうな龍の真ん中で動きを止めることにしたのは良かったんだが…

「…？」

『なんじゃ、主もイレギュラーか』

こいつらの対処がなんだか面倒な気が…とりあえず

『オイ、スカリエッティ。悪イガアソコニ立ッテル女性ニ説明ヲ頼ンダ』

「一体何を説明すればいいのかい？」

建物から出てくる最中に俺のことを色々話しておいたから、スカリエッティもイレギュラーについて説明が出来る筈なんだが…

『イレギュラー関連』

「まあ……期待しないでくれよ？ 私とて理解が追い付いていない

のだからな」

スカリエツティはそう言いながらも女性に色々説明を始めてくれた
てか、天才科学者みたいな存在なのに理解が追いついてないって…
まあ、別にいっかな
んじゃ、次はこっちな…

『…ンデ、アンタラモイレギュラー関連ツテコトデOKか?』

「…ああ」

『間違っておらんよ』

あつさり認めたな……逆に認めなかったら、こいつら斬るつもりだ
つたしな（峰打ちで斬るの、大丈夫なんだろうか?）

『トリアエズ、話ヲシヨウゼ? イレギュラー同士』

『別に構わんよ』

「同意」

イレギュラー達話し合い中・・・

いきなりだが、話し合いの結論から言うと……龍（姿がバサルモス）のイレギュラーとガトリング大好き緑ガンダム野郎は世界を壊すつもりはなく、龍の方はただ平和に生きていきたい……ガンダム野郎の方はこの世界にあまり興味が無いらしい

『ンジャ、ナンデオ前ハコノ世界二居ンダヨ？』

「それは……俺も知りたい」

なんだろう……こいつらと話し合いしていると胃が痛くなる気がするの……とりあえず2人（正確には1人と一体）で色々話をしてみらってる間に、俺はある事をしてみた

（確か 念話 ってたのは……《おい、アルテミス》）

そう、リリカル等でお馴染みの念話だ。これで神関連に連絡が取れればイレギュラー達の対処とか色んな意味でこれから楽になる筈だからな

《なによ、念話で話して来ないでよ！ おかげでお昼ご飯の醤油ラ

ーメン落としちゃったじゃないの!!」

いや、知らんし……てか、アルテミスにいきなり怒られたのが理不尽だと思えないのは何故だ…?

《というか、ポーチの中に携帯あったでしょう?! なんて携帯で連絡してこないのよ!!》

無茶苦茶過ぎだし、携帯なんぞ知らんがな…

とりあえず、アルテミスが言ってた携帯をポーチの中に手を入れて探してみた。すると……確かにポーチの中に携帯があった

しかも、俺が前世で使ってた黒と赤の2色のスライド式だった

《なんで俺の携帯がポーチの中に入ってたよ……ところでコレ(携帯)で神に連絡とか出来るのか?》

《ただ単に私が気に入ってる携帯がソレなだけで、偶々霧夜君の携帯と一緒にたつてわけよ。それと、神様達や色んな人達に電話したいなら、電話帳に入ってるからね?》

電話帳に登録してあるのかよ!?

《まあいい。それより、今から用件を話す》

俺はイレギュラー達について等を話した

《…ってことなんだが》

《成る程ね……なら、とりあえずそのイレギュラー達は此方で回収するわね》

《了承》

俺は念話を切ると、イレギュラー達に言う

『ウチノ神ガ、アンタラヲ回収シテクレルソウダ』

「…俺は別に問題ない」

『我は嫌じゃ』

ガンダム野郎はとりあえず了承したとして……龍は何故だ？

『我は数百年前にこの地、この世界に生を受けた。それに、この世界は本来、無人世界。我が静かに生きていくのはこの世界以外嫌なのじゃよ』

龍の言いたいことは把握した

とりあえず、龍の言いたいことをアルテミスに念話で話した
すると…

《別にそれでも構わないわよ。だって、世界を壊すつもりは無いんでしょ？　なら、全く問題無いわ》

《…んじゃ、ガンダム野郎だけを頼んだ》

《分かったわ……醤油ラーメン食べた後でね？》

また醤油ラーメンかよ！？醤油ラーメン好きな神様ってどうよ……？

まあ、とにかく…

『残り17カ…』

暫くは戻れそうにないな……紅き翼の皆に早く会いたいな

SIDE OUT

天使「どうも、天使です。本日は第2回『天使ちゃん発表会』の間です。今回は霧夜さんの新技の紹介です。それではどうぞ」

雷迎枝^{らいようえだ}

正式名称「鬼牙流・殲滅ノ型 雷迎枝」

スパロボ でペルセイン等が使っていた技を霧夜がアレンジした技で、元の技の名前はライゴウエ

本来は体中の鬼面から多数の光線を発射する技だが、霧夜の場合は、鬼墓参から光線や魔力弾等が多数発射する技となっている

まぶいたち
眩異断血

正式名称「鬼牙流 眩異断血」

スパロボ でペルセイオン等が使っていた技を霧夜がアレンジした
技で、元の技の名前はマブイタチ

本来の技同様、オニレンゲ鬼蓮華を振るい、衝撃波を放つ技
ただし、霧夜の場合は魔力等も鬼蓮華に纏わせて放つことが可能

天使「第2回はここまでです。これから『異形の魂を宿す者』を
よろしく願います。それでは、失礼します」

アルテミス「お持ち帰りしてOKよね？ 勿論、反論は認めないわ
！！」

「助けてくれにゃー！！」

マジで猫一匹、お持ち帰りされた…

天使「アルテミス様…」

…まあ、いいや

天使、頼んだ

天使「分かりました。時空の旅人様、faku様、レティウス様、
感想ありがとうございます。faku様に致しましては、指摘あり
がとうございました。それと、申し訳ありませんでした」

アルテミス「あつ、それと霧夜君達とラオシャンロンの結末は次回
をお楽しみにね」

では、また次回も

天使「よろしく願います」

【第捌話】霧夜の微妙な日…？（前書き）

SAOの最新巻を買いたいのにマネーが…

霧夜「頑張れ」

うう…（、、）

霧夜「…んじゃ、本編どうぞ」

【第捌話】霧夜の微妙な日…？

霧夜SIDE

ジェイルを助けてから数日が過ぎ……俺は今、ジェイルの隠れ家に
やっかいになってる

それと、ジェイルをスカリエッティと呼ばなくなった理由は…

「霧夜、ちよつといいかい？」

「その気持ち悪い発明品を壊した後なら……な！」

「なつ、酷いじゃないか。私と君は友達の間ではないか」

「いつの間に俺がお前と友達の間になってるんだよ……まあ、別に
いいがな」

そう、俺とジェイルがいつの間にか友達の間とやらになっていたか
らだ

「…にしても、だ」

「ん？ どうしたんだい？」

「何故俺は縛られていて、お前はビデオカメラを持っているのだろ
うな？」

ジェイルが先程持って来た気持ち悪い発明品（形がイソギンチャク
っぽい）を破壊して数秒としか経っていない筈なのだが、俺は先程

の気持ち悪い発明品から伸びていたコード（若干触手っぽい）にいつの間にか縛られていた

「フム、上出来だ。流石、私の作った発明品だ……破壊された後の捕縛機能が正常に作動している様だね」

また発明品か……あつ、そっぴゃう1つ思ったことが…

「…俺を縛って、なんか需要なんかあるのか？」

俺がジェイルに聞くと、ジェイルが一瞬驚いた顔をした後、笑顔で俺に言った

「霧夜、君が縛られている画像や写真、動画等はその手の相手に売るとね……私の研究費が面白い程増えるのd……」

ジェイルは喋っている途中でいきなり目の前から姿が消え、代わりにウェーブがかった薄紫の長髪の女性が俺の目の前に立っていた

「霧夜君、大丈夫！？ ドクターになにか変なことされt……霧夜君が縛られてる！？」

「お、俺は大丈夫だから、とりあえず落ち着いて……」

「う、ウーノ……？ 何故君がここに……？」

いつの間にか壁に埋まっていたジェイルに訊かれたウェーブがかった薄紫の長髪の女性……ウーノがジェイルを見ると、何処から取り出したバットを持ち……

「ドクター？ いい加減反省という言葉覚えましようね？」

「う、うーん、バットはあり……」

申し訳ありませんが、暫くお待ち下さい……

「ドクター、ちゃんと反省してただけでしたね？」

ウーノがジェイルに訊くがそこにジェイルは居らず、代わりに穴の開いている床があった

「…う、ウーノ？」

俺がウーノに恐る恐る声を掛けると、ウーノが俺に近づいて来て、俺を縛っていたコードを外してくれた

「霧夜君？ もう大丈夫ですから……とりあえず、この部屋を出ましょう」

ウーノの言葉に頷くと、俺はウーノと一緒に部屋を後にした……何故かウーノが笑顔で俺を後ろから抱き上げながら…

「おゝい、誰か私を助けてくれ」

更に、ジェイルの助けの声のBGMとともに…

部屋を後にした俺はウーノさんと別れ（その時に俺を抱きおろしていた顔が残念そうに見えたのは気のせいの筈だ…）、通路を散歩し

ていた

すると、視界の端から誰か出てくるのが見えた

「ん？ドウエと雪恵さんじゃねえか」

「あら、霧夜。一体こんなところで何をしているのかしら？」

「どうも」

ドウエと雪恵さんは俺に気付くと、俺に近づいて来た

雪恵さん……本名は伊藤雪恵。俺がジェイルを助けた時に一緒に助けた女性で、管理局のとある部隊に所属しているらしい。管理局の鎌鼬という二つ名が犯罪者達には有名らしく、ジェイルが面白そう（実際面白かったんだろうが……）に話していたが、雪恵さん自身がジェイルと上手く話とかが出来てない
ちなみに、一児の母なんだそうだし
……おっと、ちゃんと質問に答えないと

「ジェイルからウーノさんに助けてもらってたな」

「ドクターからウーノ姉様に助けてもらった？ ……ああ、そういうことね」

「またスカリエッティが霧夜君になにかしたのね？ 全く……」

その後俺はドウエと雪恵さんの2人と少し話をし、別れて再び通路を散歩し始めた……

（そろそろ昼か……食堂に向かうか）

俺はそう思うと、食堂に向かって歩き始めた

その途中、何故かウロウロしている灰色のコートを着込んでいる小柄な銀髪の少女を見つけた俺は声を掛けた（今俺のことをロリコンと思った奴……後で学校の屋上に来い）

「チンク、なにウロウロしてんだ？」

「ああ、霧夜か……実は、ドクターを捜しているのだが……霧夜、なにか知らないか？」

小柄な銀髪少女……チンクに訊かれた俺はどう答えればいいかちょっと考えた

（ジェイルは俺の部屋の床に埋まってるなんて、言っただん大丈夫だな）

思った以上に早く考えがまとまった（？）霧夜はチンクに答えたすると、チンクは…

「またドクターは……霧夜、済まなかったな」

頭を下げ俺に謝ってきた

「まあ……別にいいがな」

「本当に済まなかった」

未だに頭を下げて謝ってくるチンクを見て俺は…

「とりあえず……ジエイルを捜しに行くか」

「!? ……あ、ああ」

俺の言葉に一瞬驚いたチンクだったが、すぐに微笑し、一緒にジエイル（穴）の居る部屋に向かった…

SIDE OUT

三人称SIDE

ここは第23管理世界 ルヴェラ ……この世界は文化保護区に指定された世界であり……そして、古き良き暮らしを愛する者達が暮らす地区にして、豊かな自然と過ごせる土地……そんな土地にある静かな街の路地裏に、2人の人物が無言で居た

片方は男物の服装……顔つきからして、性別は恐らく男性……もう片方の服装は服……というより、軽装な鎧の様な服装で、顔つきが男性にも見えるが、女性にも見え、性別は全く分からなかった…

その時、路地裏に1人入って来た

服装からして女性

そして、女性が2人に近づいた後……性別の分からない者が喋り始めた

「集まったな……首尾はどうなってる」

性別の分からない者の言葉に、2人は答えた

「此方の準備は問題無い。後は時を待つだけだ」

「うちも、いつでもOK」

2人の言葉に性別の分からない者は「…そうか」と答えた後、男性と女性にそれぞれ違う物を手渡した

男性に渡されたのは一冊の本、女性に渡されたのは一本の短剣だった
男性は渡された本を読み、女性は渡された短剣を懐にしまった

「では……頼んだぞ」

本を一度閉じた男性と懐をちゃんと確認していた女性は頷いた後、
路地裏から広場へと出ていった

残された性別の分からない者はその場で空を見上げながら呟きながら、一瞬にして姿を消した

その時、奴が呟いていたことは…

「この物語（世界）にもうすぐ永遠の終焉を……そして、この物語（世界）の中心……貴様がこの物語（世界）から永遠に消える手筈は既に、我が台本で決ま^{シナリオ}っているが故……覚悟しておけ…

… 世界を渡りし月天の騎士 …… いや、 偽りの騎士 よ…」

この物語（世界）を終焉に導く始まりの合図だった…

【第捌話】霧夜の微妙な日…？（後書き）

微妙に平和な霧夜の1日をお送りしました！

天使「えつと、今回本編の最後の方に出てきていた世界『第23管理世界 ルヴェラ』については、『魔法戦記リリカルなのはForce』の1巻目をご覧ください」

そのまま天使、謝辞を頼んだ（^・^）b

天使「分かりました……時空の旅人様、竜華零様、レティウス様、感想ありがとうございます」

…とまあ、言いたいことは言い切ったわけだが

天使「まだありますよ？」

なにが？

天使「前回の後書きのアレですよ」

前回の後書き……ああ、アレ（贈り物のラオシャンロン）が

天使「結果は霧夜さん達猫隊がラオシャンロンに勝ちました」

猫が空から奇襲したのは面白かったなwww

天使「全くです。アレは萌えますが、ラオシャンロンの背中も（猫達の爆弾によって）燃えていたのでちょっと面白かったです

それと、今回も時空の旅人様からの贈り物で、リオレイア・リオ
レウス・リオレイア亜種、リオレウス亜種、リオレイア希少種、リ
オレウス希少種 の陸の女王達と空の王者達です！」

現在進行形で霧夜が戦ってる奴等か

天使「作者、その発言は……狙われますよ？」

その時はお前を生け贄にするだけだから

天使「酷ッ!？」

では、次回もよろしくお願いします（^^ゞ

【第玖話】約束という名の枷（前書き）

脳内予定より内容の展開が早いのに対し、更新が遅いのは何故…

霧夜「お前がノロマなだけだろ…」

否定はしない

霧夜「ったく……んじゃ、本編スタートってことで」

【第玖話】約束という名の枷

霧夜SIDE

今は朝、時間帯的には朝飯の時間帯だが…

「…なあ、ウーノさんや」

「いつも呼び捨てなのにどうしたのかしら？霧夜君」

「何故俺の髪を弄ってるんですか…？」

俺が起きて寝呆けていた時から髪をウーノに弄られているから、いい加減朝飯とか着替えとか色々したいんだが…すると、部屋の扉が開き…

「霧夜君、スカリエッティが渡したいもn…」

部屋に入って来たのは雪恵さんだった

雪恵さんもだいぶここ（スカリエッティの隠れ家）に慣れてきた所為で、スカリエッティと普通に会話出来たり、ウーノ達を手伝ったり…意外に今の状況を楽しそうにしている

「雪恵さんどうs「動かないで！！」はい…」

雪恵さんにどうかしたのか訊こうとしただけが、何故かウーノさんに動かない様にと怒られた
そこまで俺の髪を弄りたいですか…まあいいか

俺は雪恵さんに念話で話し掛けることにした

《んで、雪恵さん……どうしたんです？》

《えっとね……スカリエッティが貴方に渡したい物があるから呼んで来てって頼まれたの》

《ジェイルが？》

「一体俺に渡したい物ってなんだよ」よし、出来たわ「何が出来たんだよ…

「ウーノ…」

雪恵さんが俺を見た後ウーノを見る
そして…

「GJ!!」

ウーノに向かって言った

(…てか、何がGJなんだよ)

俺はそう思いながら近くにあった鏡を覗くと…

(何で俺はポニーテールになってんだよ…)

何故か俺の髪型がポニーテールになっていた
とりあえず…

(さつさとジェイルのとこ行くか…)

「という感じで、俺はポニーテールの髪型にされたんだが…」

「うむ、服装と器用にマッチしている……ウーノ、君は何を目指しているのか非常に気になっていたよ…」

ジェイルの部屋に着いた後、ジェイルに何故ポニーテールになっているのかを説明(もとい愚痴ってた)をすると、ジェイルは呆れる様に俺の話を聞いてくれた

「そついや、俺に渡したい物って？」

俺が訊くと、ジェイルが白衣のポケットから赤……というより、紅色に近い赤色のイヤリングと、狼の顔のマークの付いたカードを出してきた

「イヤリングの方の名が 神夜^{かぐや}、カードの方の名が ベーオウルフ……私が君に作ったデバイスだ」

「デバイス…」

ジェイルは俺にイヤリング型とカード型のデバイス……神夜とベーオウルフを渡して来た

俺は2つに触れようとするが、その直前で手を引つ込めた

「どうしたんだい？」

「…受け取れねえ」

俺はジェイルにそう言っと、部屋を出ていった…

俺がジェイルから受け取れない理由…それは、俺が前世で契った約束が故に…約束を果たせなかった俺が、受け取るべきではないからな…

SIDE OUT

??? SIDE

ここにあの子が居る……うちが枷を与えてしまったあの子が…

うちは手元にある一本の短剣の柄を握る

アイツ が言う事が本当なら、この短剣であの子から枷を外すことが…

「貴方の枷は、うち自身が必ず解き放つてみせる……だから…」

其処で待つててね…

…うちの可愛い霧夜

SIDE OUT

霧夜SIDE

ジェイルの部屋を出ていった後、俺は隠れ家の近くにある泉の縁に居た隣には…

「良い風が吹く場所だな…」

…何故かチンクが居る

とりあえず俺はチンクの言葉に「ああ」と答えた後、芝生の上に寝転がったチンクの言う通り、いい風が吹いている……まるで、今の俺を慰めている様に…

「……………」

「……………」

俺もチンクも一言も全く喋らず、時間と風が俺の周りを過ぎていく…

「……………霧夜」

「…なんだ」

「…お前は一体、何を抱えているんだ？」

チンクは俺の目を見ながら、ジェイルの作ったデバイスのことを訊かずに、何故か俺が何かを抱えていることを前提に訊いてきた

「お前のことはドクターが教えてくれた……お前がドクターをあの研究所から助けてくれたことや、転生者という存在ということ、この世界のイレギュラーについて色々な……だからな……その、だな……」

「……？」

いきなりチンクの声が段々小さくなっていく……ところでチンクは、俺になにを言いたいんだ……？

とりあえず俺はチンクを落ち着かせる為に声を掛けようとしたが、それはある声によって遮られた……

「あらあら、そんなに可愛いお嬢ちゃんを困らせるなんて……霧夜もまだまだ駄目ね」

俺は急いで起き上がり、声のした場所……泉の反対岸を見た
そこには本来この世界に存在しない存在であり……

「なんであんたがこの世界に居るんだ……」

……椿姉つばき！！」

……前世で俺が12歳の頃に、とある事件に巻き込まれて亡くなった
俺の実の姉……遠坂椿が微笑みながら立っていた……

【第玖話】約束という名の枷（後書き）

まさかの霧夜の姉が本編&後書き登場！

椿「皆さんこんばんは（？）、霧夜の姉……遠坂椿です」

さて、今回から椿氏には後書きに度々来ていただきたいのですが…

椿「うちは別に構わないけど……霧夜とは、ね？」

勿論了解……んじゃ、椿氏よろしく

椿「ええ。レティウスさんと時空の旅人さん、感想ありがとうございます」
いました。これからもこの作品をよろしく願いますね」

では、また次回もよろしく願います！

【第拾話】俺（うち）と椿姉（霧夜）（前書き）

思った以上に展開が…

天使「作者が何か言ってますが、本編をどうぞ」

【第拾話】俺（うち）と椿姉（霧夜）

霧夜SIDE

「なんであんたがこの世界に居るんだ……椿姉！」

俺は泉の反対岸で微笑みながら立っている椿姉に向かって叫んだ
椿姉は俺が12歳（前世の年齢）の頃に、とある事件に巻き込まれて亡くなった俺の実の姉で……この世界に本来存在しない存在……
そして、俺が約束を交わした（果たせなかったが……）人、本人でもある

俺の声を聞いた（と思われる）椿姉は微笑みを浮かべたまま後ろの空間から、一振りの刀を出し、その直後、謎の化け物が姿を見せた
椿姉は化け物の頭を撫でた後、化け物の背中に乗り、此方に向かって来た

俺は驚きながらも急いでチンクを抱き締め、すぐに横へ飛び退いた

「チンク！大丈夫か！！」

「私は平気だ」

チンクが大丈夫か確認した後、俺は落ち着いて椿姉について、思考をフル回転し始めた……

死んだ筈の椿姉が何故生きているのか

何故椿姉がこの世界に入るのか

椿姉の後ろの空間は一体なんなのか

椿姉の持つ刀はなんなのか

椿姉があのだを出した後に現れた化け物はなんなのか

俺がフル回転させた思考が行き着いたのは、最も簡単な答えであり…… 最も残酷な答えだった

その答えこそ……

「転生者……」

俺は呟きながらも、その答えによって繋がっていく疑問が、恨めしかった…… 全ての疑問は、転生者で結び着いたのだから……

死んだ筈の椿姉が何故生きているのか…… 転生者として転生したから

何故椿姉がこの世界に入るのか…… 転生先だから

椿姉の後ろの空間は一体なんなのか…… fate に出てくるギルガメッシュの持つ宝具 王の財宝^{ゲイト・オブ・バビロン}の能力を転生者として得たから

椿姉の持つ刀はなんなのか…… 喰霊^{しゅうれい} というアニメやマンガに出てきていた日本刀で、名前は 獅子王^{ししおう}。恐らく王の財宝と同様、能力として得たか…… それとも、別の方法で得たか……

椿姉があのだを出した後に現れた化け物はなんなのか…… 獅子王に宿る霊獣で、種族（？）は鵜^{めえ}。名前はアニメで出ていたが、覚えてない

すると、俺の眩きが聞こえたのか……椿姉が鵠の上から俺を見て言った

「そう、うちはやりたいことがあったから転生者になった……ある条件の代わりにね……」

「ある条件……」

椿姉の言った ある条件 がもし俺の考えていることと同じなら……本当に最悪の展開が起きるな

「チンク、お前は隠れ家に急いで逃げろ」

「なっ!?! 何故だ!?!」

「椿姉は……あの人は、お前じゃ全く相手にならないし、お前はまだ ステインガー が出来ていない」

「っ!?!」

ステインガー は、チンクの投げナイフ型の固有武装なんだが、未だ完成していない
チンクは俺の言葉で悔しそうな顔をした

「……ただし、約束しろ……必ず、私達の所に帰って来い」

「分かった」

俺が答えると、チンクは隠れ家のある方へ走って行った

俺はチンクの姿が見えなくなった後、椿姉を見る

「条件つてのは……この世界（物語）を破壊するってことか？」

「ええ」

即答かよ……

俺は鬼蓮華を出すと、抜刀の構えをとった

「そんな物騒な物で構えたら駄目よ、霧夜」

「椿姉が言えることじゃないよな!？」

生前の椿姉は……ある意味天然だったから、いつも俺や妹が苦労してたな……

「ん? ……ああ、確かにね。なら、ありがとう。もう戻ってくれるかな? ……乱紅蓮^{らんぐれん}」

椿姉の言葉に鵜は頷いた後、段々姿が消えていき……

「なら、これでいいわね? 」

椿姉自身も、王の財宝に獅子王をしまった

だが俺は、鬼蓮華を構えたまま動かなかった

「全く、そんなに気張らなくてもいいのに……霧夜、今日は私が転生者になってまでしたかったことをしに来ただけなのよ? 」

「椿姉が転生者になってまでしたかったこと……? 」

俺は椿姉の言葉を聞いて、少しだけ気が抜けた

俺から気が抜けたのを見た椿姉は頷いた後、一歩ずつ俺へと歩み寄って来て…

「なっ!？」

俺を優しく抱きしめた

「つつ、つばきん」霧夜……ごめんね」なっ、なんで泣いてんだよ、椿姉…」

椿姉は両手で俺を優しく抱きしめながら……泣いていた

「うちが死ぬ前に霧夜と約束した事……覚えてる？」

椿姉の言葉に俺が頷くと、椿姉は俺の頭を撫で始めながら言葉を続けて言った

「あの時、うちは『約束は必ず守り、果たす事』って言ったよね？」

「だけど……俺はその約束を果たせなかった。そのせいで、椿姉は…「それは違うよ」えっ…？」

違っって、一体何が…？

「霧夜はあの時、ちゃんと約束を果たしてた。約束を果たしてなかったのは……うちの方なんだよ」

あの時って……椿姉が亡くなった日で、俺が約束を果たせなかった

日のことだよな…？
あの日は、椿姉と…

【第拾話】俺（うち）と椿姉（霧夜）（後書き）

いきなりだが、新しく二次創作の小説を書くことにしゅ…グハッ！？

霧夜「よし、逝ったな」

アルテミス「南無」

後は…たの…む…

天使「仕方ないですね…では、作者が言っていた新しく書く二次創作についてですが、初投稿は9月の初め頃を予定しているらしいです」

アルテミス「なんで、無謀なことをしたがるんだろうね？」

霧夜「知るか」

アルテミス「…ちなみに、本編の次回の更新は今月中よ」

天使「えっと…時空の旅人様、秋代様、レティウス様、雨季様、竜華零様、感想ありがとうございます」

霧夜「それと、お土産に色々モンスターが送られて来ていたが…全てアルテミスが保護（というより、ペット？）したからな」

アルテミス「では、また次回もよろしくね」

霧夜「んじゃ」

【第拾巻話】F a t e D a y（前書き）

上手く書けたか心配な本話ですが…

椿「それでは、本編をどうぞ」

【第拾巻話】 Fate Day

チュンチュンと鳥の鳴き声が聞こえてきた朝方、とある民家の部屋……その部屋には何故か、一組の青年と女性が布団で眠っていた。すると、布団で眠っていた青年が目を擦りながら目を覚まし、隣で眠っている女性を見た。

「またかよ……」

青年はそう言った後に布団から出ると、着替え始めた。

青年が着替え終わった時、青年と女性が寝ていた部屋の扉が開き、1人の少女が部屋に入ってきた。

「お兄ちゃん、おっはー……」

「^{かえで}楓、おっはーって古くないか……？ とりあえず、おはよーさん」

青年は少女……楓に答えた後、楓の横を通って部屋を出て行こうとした。

すると、楓が未だに寝ている女性を見て……

「……お兄ちゃん。椿お姉ちゃん、またなの？」

と訊いてきた。

青年は未だに布団で幸せそうに寝ている自身の姉、椿を見て「ああ」と答え、部屋を出て行った……

青年が部屋を出た後に向かったのはリビング
リビングでは楓より一回り大きい少女が居た

「もみじ 桜、おはようさん」

青年が少女……桜に挨拶すると、桜は青年に気付いた

「あつ、兄ちゃん。椿姉さん知らない？ 朝から姿見てないんだけど…」

「椿姉は俺の部屋で寝とる」

青年の言葉を聞いた桜は「またなんだ…」と言った後、溜息をついた

「溜息つきたいのは俺の方なんだが…」

青年はそう呟いた後、桜の隣に置いてある一冊の本を見た

（その本を朝っぱらからリビングに持ち込むなよ…）

桜の隣に置いてあった本は、俗に言う剣術の本で、桜は中学2年で
剣道部に所属しているのだ

その本を見た青年は再び溜息をつきながら、台所へ向かった
理由は、青年が今から4人分の朝食を作るからだ…

（今日の朝飯のおかずは……目玉焼きとウインナーでいいか）

「桜、椿姉達を起こしに行つて来てくれ」

青年は出来上がった朝食を机に並べながら言った

「別にいいけど…椿姉さん達って？」

「俺が部屋出て来る時に楓が部屋に入ってきた」

桜は「成る程」と言い、リビングを出て行った
暫くして、桜と楓、そして先程まで青年の布団で寝ていた椿がリビングに入ってきた

「楓、椿姉、朝飯出来てるぞ」

「ありがとー」

「んー…」

そして、4人が机を囲んで座り…

「いただきます」

「んー…」

青年の作った朝食を食べ始めた…これが、いつもの遠坂家の始まり…

朝食を食べ終わった4人はそれぞれ独自に行動を開始した
椿は自室…ではなく、青年の部屋で二度寝を…

桜は庭で木刀を使い、剣道の素振りを…

楓は台所で食器洗いを…

青年は…

「毎度思っのだが……何故俺が…」

…洗濯していた

青年はブツブツと言いながら洗濯機から洗濯物を出し、ハンガー等に洗濯物を掛け、洗濯物に洗濯バサミを付けていく…

その時青年は、ある洗濯物にを見て、手が止まった

「また椿姉かよ…」

青年が目にしたのは女性物の下着であつた

青年は本日3度目の溜息をついた

遠坂家には、青年1人と椿、桜、楓の3人の女性の計4人が住んでいる

そして、洗濯物は青年と女性3人で別々に洗濯するという家族内で決めている決まりがあつた

その時に、この決まりを作つたのが…

「確か、俺と椿姉だつた筈なんだが…？」

青年は自ら作つた決まりを自ら無視している姉に再び溜息をついた…

昼頃

皆で昼食を食べた後、青年は近所のショッピングセンターに来て、買い物をしていた

「これとこれで……後は、これと…」「あれ、霧夜。なんで居るの?」
ん? 椿姉か……どうした?」

椿に声を掛けられた青年……霧夜は椿と話をしながら買い物が続けてることにした…

買い物も無事終わり、せっかくだから寄り道して行くこととなった
椿と霧夜は、ショッピングセンター内を歩いていた
その時、霧夜の携帯に電話が掛かってきた

「あつ、椿姉。ちょっとごめん」

椿が頷くのを見た霧夜は、電話に出た

「もしもし」

『あつ、お兄ちゃん？ 楓だけど』

「どした？」

『卵頼んだ』

「卵な、了解」

霧夜は電話を切った後、椿に電話の内容を話した

「分かった。んじゃ、霧夜は買ってきて来て。私は待ってるから」

「ん……速く、そして必ず迎えに来る」

霧夜の言葉（約束）に椿は微笑み、霧夜はその場を後にした……し

かし、追加の買い物を済ませた霧夜は、椿を待たせた場所に向かったが……椿は何処にも居なかった…

更にその日は、椿が遠坂家に帰って来なかった…

椿が遠坂家に帰って来なかった次の日…

『遠坂椿の死体が廃工場で見つかった』と警察から電話が掛かってきた…

【第拾巻話】F a t e D a y（後書き）

夜風が涼しい…

霧夜「現実逃避するな」

いや、だつてさ…

アルテミス「まずは謝辞からね。時空の旅人さん、十六夜アミナさん、竜華零さん、レティウスさん、感想ありがとうね」

霧夜「時空の旅人さんからまたお土産で、時空の旅人さんの執筆してる作品の主人公の神威が特別編の時になっていた黒レウスなんだが…」

天使「黒さんはいい子ですね」

黒レウス「ギャア」

霧夜「…何故幼女に懐いているんだ？」

さあ？

アルテミス「んじゃ、次回もよろしくね」

【第拾弐話】明かされた事実／解き放たれた枷（前書き）

今話から “SIDE” を無くしてみようと思います

霧夜「上手く書けてるか不安極まりないがな…」

それでは、本編をどうぞ

【第拾貳話】明かされた事実／解き放たれた枷

泉からの風を受けながら、霧夜は自身の姉……椿から少し離れた状態で、遠坂家に起きた 運命（悲劇）の日 を話し終えた

話し終えた霧夜の複雑そうな顔を見た椿は、少し時間が経ってから話し始めた……あの日（運命の日）、自身の身に一体何が起きたのかを…

「あの日、霧夜が追加で買い物に行つてすぐ後……うち、誘拐されたの」

「誘……拐……？」

「相手はうちのクラスメイトで……ほら、覚えてる？ あの 浜呂^{はまろ}院^{いん}の娘さん」

椿の言葉に、霧夜は聞いたことの名を思い出した

（ 浜呂院 って……前世で、ちょっと有名な財閥の名前だな ）

霧夜は 浜呂院 について思い出した時、 浜呂院 について、もう一つ思い出した

前世で、椿のクラスメイトにも浜呂院の姓を持つ女性が居たことを…

「正確には、あの人の秘書と、その部下の人達数人が黒幕だったんだけどね…」

椿の言った言葉は、自身を誘拐した者達を暴露したのも同然だった霧夜は、椿の暴露した誘拐犯の正体を知った後、右手を拳にし、心

の奥から沸き上がってくる怒りを我慢した
しかし、霧夜の怒りは一瞬だけ消えた

「それでね、うちは誘拐された後…

…犯されたの」

椿の一言によって…

(……は?)

霧夜は椿が何を言っているのが理解出来なかった……否、頭が理解は出来ているのに対し、心が認めようとしなかった
だが椿は、最後に言った

「沢山やられて、絶望の淵にまで堕ちた私は……そのまま殺された」

淡々と話した椿を見て、霧夜は啞然とした

「これが、あの日起きた……事実よ」

椿は話し終えた後、霧夜に向かって言葉を掛けようとした

[illegible]

しかし、霧夜は我を忘れたかの様に、地面を殴った……

（椿姉の理不尽な死から救われなかったあの頃の俺が恨めしい…）

あの頃の俺の弱さが憎らしい……

椿姉が転生者になってまで、俺との約束に決着を着ける事態になったことが悔やしい…）

霧夜は生前の自身の腑甲斐なさや、椿に起きた真実に対し、怒り狂ったかの様に何度も何度も地面を殴り続けた……

そして霧夜は……自分という弱い存在に嘆いた

そんな霧夜を、椿は悔やむ様に見つつ、懷から一本の短剣を取り出した

（この短剣が、母さんが亡くなる直前に言っていた霧夜の中に眠っている枷を……霧夜を救った異形を、霧夜から取り除くことが出来る……）

椿は何か覚悟を決めた様に頷いた後、一瞬で霧夜の背に回り、そして……

「ごめんね……霧夜」

霧夜に呟きの様な声で謝りながら……短剣を霧夜の背に突き刺した

その直後……

↙

[illegible]

霧夜が声にならない様な叫び声を上げた

それを聞いた椿は、一瞬だけ顔を歪めたが、すぐに表情を戻し、王の財宝 から2本の刀を取り出す

取り出した2本の内、右手に持ったのは、一度しまった獅子王
……左手に持ったのは、この世界に居た転生者から倒して手に入れ
た刀……
爆砕牙

椿は2本を持ち、霧夜の背中に突き刺した短剣を睨む

暫くして、霧夜の背中から血の様に紅っぽい霧が出てきて、霧は段々形を作り始めた
そして椿の目の前には、自ら形を作った霧ではなく……紅い色の着物を着た、1人の女性が立っていた

「この姿になるのは、何年振りかな……」

女性は自らの姿を見て、懐かしんでいた
椿は女性に訊く

「貴方が母さんの言ってた……霧夜を救った 異形 で、合ってるかな？」

椿に訊かれた女性は目の前に居る椿を見る

「霧夜を救った 異形 ？ ……成程、お前は桜さくらの娘か」

女性は椿の質問に対し、自己完結する
そして、女性は足下で倒れている霧夜を見た

（霧夜、か……久しい名前を聞いたな。まさか、こうして桜の息子を……私の半身となった者を見る時が来るとはね……）

女性が過去の出来事に耽っていると、椿が女性に言う

「霧夜を救ってくれた貴方には悪いけど……貴方を倒させてもらうわ」

「私を倒す？ 倒せるものなら……やってみなさい」

突然女性の周りを先程の紅い霧が包み込み……霧が消えた後、女性の居た場所には 人格 の名の異形が…… ペルゼイン・リヒカイ トが、そこに居た……

【第拾貳話】明かされた事実／解き放たれた枷（後書き）

眠い…

アルテミス「私も…zzz」

天使「アルテミス様!？」

霧夜「面倒な…」

というわけで、後は頼んど…zzz

天使「寝るの早っ!？」

霧夜「…まあ、いいか。十六夜アミナさん、時空の旅人さん、レテ
イウスさん、竜華零さん、凹凸さん、感想ありがとうございます。
凹凸さんには、アドバイスもありがとうございました」

天使「レテイウス様には、護りの小太刀 という小太刀をいただき
きました。霧夜さん、色どうします?」

霧夜「黒」

天使「分かりました。それと、護りの小太刀 も本編で出す可能
性があることをご了承下さい」

霧夜「んじゃ、次回もよろしく」

天使「お願いします」

【第拾参話】前哨戦（前書き）

微妙な内容な気が…

アルテミス「それじゃあ、本編どうぞ」

霧夜「あつ、後書きでちょっとしたお知らせみたいなのもあるから」

【第拾参話】前哨戦

泉の風が吹く中……椿は右手に 獅子王 を、左手に 爆砕牙 を持ち、ペルセインは右手に 鬼蓮華 を持つて構えていた
そして、泉に若い青葉がユラリユラリと落ちて来て、泉の水面に落ち、水面に波紋が広がる

水面の波紋が椿とペルセインの居る縁にまで届いたのと同時に、2人（正確には1人と一体）の距離は縮まり、互いの得物がぶつかり、火花が散った…

「はぁ！！」

『ンツ！！』

椿の獅子王とペルセインの鬼蓮華が高速に火花を散らしながらぶつかり合う中、椿は爆砕牙をペルセインの体へと振るった

しかし、爆砕牙はペルセインの体ではなく、ペルセインの左肩に浮いていた鬼菩薩を斬った

爆砕牙に斬られた鬼菩薩はその場で爆発を起こし、椿とペルセインは一度離れ、互いに距離を置いた

（爆砕牙の爆発は、正直に言えばうち自身にも被害が出る。それに、獅子王をしまつたら、乱紅蓮が消え、霧夜が……それなら！）

椿は爆砕牙を王の財宝にしまうと、霧夜の近くの地面に獅子王を突き刺す

そして、王の財宝から新たに一振りの刀を取り出し、構えた

そして椿は、構えたままペルセインに近づき、刀を振るった
ペルセインは椿の新たに取り出した刀に注意しながらも、鬼蓮華で
流した

しかし、椿の持つ刀は切先からいきなり火薬の匂いと同時にガスを
噴出し、刀が素早く切り返してきた

『ナツ！？』

ペルセインは慌てて回避しようとするが、椿の刀から再びの火薬の
匂いがし、それと同時に、切先から二度目のガスが噴出し、先程と
同じ様に、素早い切り返しをしてきた為、右肩に浮いていた鬼菩薩
が斬られてしまった

（まさか、鬼菩薩を斬られるなんてね……それ程の力を持った刀つ
てこと？）

ペルセインはそう思いながら、自身の後ろの方に転移した
転移は、アインスト特有の能力の一つで、本来は使った後も問題な
く活動出来る筈なのだが、ペルセインは何故か動かなかった…

（この距離の転移だけでこのさま、か……やっぱり、半身 程度
じゃ仕方ないか…）

…否、動けなかった
ペルセインは転移で距離を置いた椿を見ながら、とある構えをとり
始めた…

ペルセインが転移した時、鬼菩薩を斬った直後の椿は少し肩で呼吸
していた

「やっぱ、これキツいね…」

椿は持っている刀を見ながら愚痴る様に言った

椿が今持っている刀は まいけるじゅつぎょ 舞蹴拾参號 と名前で、本来は退魔刀と呼ばれる刀の一種だ

椿は一度大きく深呼吸をすると、王の財宝から ある物 を取り出し、左手に付けた

理由は、先程転移したペルセインが何やら鬼蓮華を構え始めた為だ（これを使うんだったら……せっかくだし、あの（恐らく）有名な台詞言っておこうかな？）

椿はそう思うと、舞蹴拾参號を逆手に持ち返え、 ある物 を付けた左手を構えた
そして…

「ドリル は男のロマン！！……うちは女だけど」

ちょっとテンションが上がった感じの椿の言葉とともに、椿が左手に付けていた ある物 …… アタッチメントドリル（以後、ドリル） が回転し始めた…

椿のドリルが回転し始めた直後、ペルセインが先に動き出した

『…マブイタチ！』

鬼蓮華を振って、衝撃波を椿に放ってくるが、椿は回転しているドリルを衝撃波にぶつけた

「残念だけど……毎分6000回転のドリルの破壊力は伊達じゃないのよ！」

衝撃波を破壊した椿は、ペルセインに向かって一直線に走り始めた

『クッ……ソレナラ！』

ペルセインの胸部にいきなり黄色い光が集まり始め……

『……ハーデス・ウェイ！！』

集まった光は、向かって来る椿に向けて撃たれた

椿は走りながら左手のドリルを光に向けてぶつける

光とぶつかるドリルだったが、段々押されてきた

「（それだったら……）撃ち抜く！止めてみる！！」

椿の言葉と同時に、ドリルの部分から火薬の匂いがしてきて、その直後にドリルの部分が噴出し、光を押し返し始めた

ドリルが噴出し、光を押し返し始めたのを見たペルセインは鬼蓮華を急いで構えた

そして……

『（あまり使いたくなかったんだけど……）……千慄桜華ノ舞！！』

ペルセインは霧夜が使っていた技を椿に向けて放ってきた

霧夜の技だと知らない椿は、無数に飛んでくる斬撃を見て、左手のドリルの残った部分を左手から外し、上に投げるのと同時に再び爆砕牙を王の財宝から取り出し、落ちてきたドリルの残った部分を爆

砕牙で一瞬にして斬った

爆砕牙の効果により、二度目の爆発が起きる

椿は爆発が起こした後、急いで爆砕牙を王の財宝に戻し、地面に舞蹴拾参號を突き刺した後、一瞬の内に泉の中へ潜った

ペルセインは何かが泉に落ちた音を聞くと、泉から少し離れ、それと同時に再び胸部に光が集まり始め…

『コレデ終ワリ……ハーデス・ウェイ!!』

泉に向けて光を放った

しかし、ペルセインの放った光は、何かに吸われる様に消えた（……）

そして、ペルセインの視線の先には…

「流石にちよつとだけ危なかった……かな？」

右手に槍を持って、左手を前に突き出した椿が、泉の浅瀬に立っていた…

「流石にちよつとだけ危なかった……かな？」

椿は右手に槍を持ち、左手を前に突き出した状態で、泉の浅瀬に立っていた

（…けど、まさか出来ると思ってなかったな）

椿が右手に持っている槍は バンデラス 万寺巢 という槍なのだが、とある原作でこの槍を持っていたキャラクターの持つ元々の能力… 霊力を

喰らい、浄化し、力に変える という能力を所持している
しかし、椿の場合は、椿本人ではなく、所持している万寺巢に 相
手の力を喰らい、浄化し、力に変える という能力として、何故か
に使えるのだった

「さてつと…」

椿は万寺巢を構え直し、一度息を吐く
そして…

「前哨戦はここまで。こっからが………本当の戦い！」

椿は万寺巢を構えた状態で、ペルセインに向かって走り始めた…

【第拾参話】前哨戦（後書き）

まずは謝辞を

椿「時空の旅人さん、竜華零さん、レティウスさん、感想ありがとうございました」

んで、お知らせです

椿「えつとですね……作者が、うちと異形との戦闘から1、2話後に、コラボを考えてるっぽいんです」

それで、良かったらコラボしても大丈夫という方は、コラボさせて下さい！

椿「ちなみに、今回のコラボ募集の理由は……なんでしたっけ？」

理由は、ユニークが5、000人&お気に入り登録数が30件突破したからです！

椿「だそうですから、これからもよろしく願いします」

【第拾肆話】序章終幕（前書き）

遅くなって、すみませんでした！！

霧夜「とりあえず……本編スタートな」

【第拾肆話】序章終幕

椿とペルセインの戦いは、先程までの戦い（前哨戦）と比べてはならない程、格段に上がっていた

椿が万寺巢（槍）で突きを放てば、地面の表面に生い茂っている芝生が剥がれる様に吹き飛び…

ペルセイインが鬼蓮華（刀）を振るえば、周りの木々が砕け、空気を裂く様な斬撃を放ち…

1人と一体の辺りは既に、戦場の跡地と化していた…

椿は一瞬でペルセイインに近づき…

「せいやッ!!」

万寺巢を払う様に斬るが、ペルセイインは紙一重に避けるのと同時に、鬼蓮華で椿の顔に突きを放つ

「ッ!!」

椿は自身の目の前に迫る鬼蓮華を、頭を斜め後ろに傾けることで回避しようとする……しかし、タイミングが悪かった所為か、鬼蓮華の刃が椿の頬を微かに擦り、椿の頬から、少量の血が流れた

椿はペルセイインと距離を置く為、一度後ろに跳んだ後、自身の頬を袖で拭った

そして、距離を置いたペルセイインに向かって万寺巢を突き出すよう

に構え…

「穿て！万寺巢！！」

まるで白と黒の、二色の巨大な槍が交わったの様な形の砲撃を、万寺巢の刃先から放った

椿が万寺巢から放った砲撃は、先程（前哨戦の時）、ペルセインの技であるハーデス・ウェイを 相手の力を喰らい、浄化し、力に変える能力 で、自身の力に変え、椿はその力を砲撃として放ったのだった

『ッ！！』

ペルセインは椿の放った砲撃を回避しようとするが、ペルセインの回避より、若干砲撃の速度の方が速かった故に…

『クッ！？』

ペルセインの左腕が全て、砲撃に巻き込まれ、そのまま消し飛んだペルセインはすぐに自身の左腕を再生させようとするが…

「させないわよっ！！」

『グッ！？』

椿がいつの間にか万寺巢を構えた状態で、ペルセインに突っ込んで来ていた

ペルセインは迫りくる椿に対し、左腕の再生を一旦諦め、鬼蓮華で応戦した

そして、椿の万寺巢と、ペルセインの鬼蓮華の間合いでは、見えな

い程の斬り合いが起きていた…

しかし、そんな斬り合い……そして、この戦いも、突如終わりを迎えた…

「ッー!!」

『ナツ!?!』

文字通り、イレギュラーによって…

椿は自身の身にいきなり襲い掛かってきた衝撃を受けながらも、ゆっくりと自身の左腕を見た

そこには……一本の矢が突き刺さっていた

椿は後ろを振り返ろうとするが、何故か体が言う事を利かず、その場で膝を着いてしまう

（体が自分の思い通りに動かない……この矢、まさか猛毒が?）

椿は自身の身に起きている状況の把握をするが、それと同時に、内心苦笑した

(…うち自身、呆れたものね。こんなにも冷静に状況把握出来るなんて、ね)

そして、樁の意識が途切れる直前に、樁は聞いてしまった……

[illegible]

自身の弟が……霧夜が、自分の名前を叫んだのを……

霧夜が目を覚ますと、隣には、先程まで自身の姉……椿と共に居た筈の霊獣（乱紅蓮）が居た

（なんで、椿姉の乱紅蓮が俺の隣に…？）

霧夜は、ゆっくりと体を起こした後、辺りを見回す

すると、自分の倒れていたのは泉から近い場所で、近くには、乱紅蓮の宿っている刀（獅子王）が地面に突き刺さっていた

（…そういや）

気絶した直前に、なにか背中に刺されたような痛みがしたことを思い出した霧夜は、思わず自分の背中に手を回す

しかし、なにも刺さっていなかったことに、疑問を抱いた

（あの痛みはいつたいたんだ？ それに、あの痛みの直後に、奥底からなにか出てくるような感じがしたような…）

霧夜が色々と考えていた時だった

突然、何処からか爆発音に似た音が聞こえてきた直後、空から幾つもの水滴が落ちてきた

「冷たっ……てか、さっきの音って…！？」

なにやら嫌な予感がした霧夜は、鬼蓮華を出そうとするが…

「鬼蓮華が出て来ない…」

鬼蓮華が出て来ないことに、更に嫌な予感がした霧夜は、咄嗟に獅子王の柄を掴んだ

グウルルルル…

いきなり獅子王（自身の宿っている刀）を掴んだせいだろう、乱紅蓮が唸り声を上げてきた

霧夜は柄を一旦離れた後、乱紅蓮を見る
そして…

「乱紅蓮、頼む……俺に、力を貸してくれ！」

霧夜は乱紅蓮に頭を下げた

すると、乱紅蓮は…

霧夜は、自身の頭に何かが当たっているのに気付くと、ゆっくりと頭を上げた

頭を上げて見たのは、乱紅蓮の顔で、乱紅蓮は霧夜に頭を擦り寄っていた

乱紅蓮の行動に気付いた霧夜は、乱紅蓮の頭に恐る恐る触れた
しかし、乱紅蓮はなにもせず、まるで霧夜に触れられたいかのようだった

「乱紅蓮……ありがとう」

霧夜は乱紅蓮に礼を言うと、獅子王を地面から引き抜き、獅子王を持った状態で泉の方……椿の居る場所へ向かって、走り始めた…

霧夜が泉に到着した直後のことだった……何処からか飛んできた一本の矢が、椿の左腕に刺さったのは…

（椿姉……？）

霧夜が啞然としている時、椿がその場で膝を着いてしまい……

「椿姉ええええええええええええええええええええええ！！」

霧夜は咄嗟に自身の姉の名を叫んだ……

そしてこの時、霧夜の物語の本当の始まりは、幕を上げた……

【第拾肆話】序章終幕（後書き）

変な所で終わってもうた…

椿「何やら、色々大変そうな事態になっていきそうね…」

…新しい携帯が使い難いから、暫くは更新スピードが遅くなりそうだから、椿の言った大変そうな事態が書くのが遅くなるのですよ

椿「頑張つて慣れようね、作者さん。それと、時空の旅人さん、レティウスさん、十六夜アミナさん、竜華零さん、感想ありがとうございます」

それと、1周年記念に、なにをするか決めました！

椿「確か、皆さんに座談会がどうか色々訊いてたけど……結局、なにをするつもりか決まった？」

それは、決まったが……詳しく(?)は、10月10日当日に判明します！

椿「うちのには、皆気になりそうな気がするんだけどね…」

言うわけねえよ…

というか、言ったら意味ないじゃん!!

椿「だよね？ では、次回もよろしくお願いします」

【第拾伍話】役割／約束（前書き）

すみませんが、今回は短いです！

霧夜「んじゃ、本編開始」

【第拾伍話】役割／約束

霧夜は自身の姉、椿の名を叫びながら、握っていた刀：獅子王を、矢の飛んできた方へ無茶苦茶に振るう

霧夜が獅子王を振るった時に獅子王から無数ね斬撃が放たれ、斬撃が飛んで行った先から悲鳴が聞こえた

しかし霧夜は、悲鳴に全く反応せず、獅子王を投げ捨て、椿に慌てて近づく

しかし、椿に触れる直前に、椿の姿は突然消えた

「つば、き……ね、え？」

霧夜は目の前で突然消えた椿を見て、まるで壊れた人形のようにぐずれ落ちた

それを見たペルセインが、霧夜に近づく

『ヨク聞ケ、半身。アノ女ハ確實ニ生キテイル。恐ラク、アノ女ハコノ世界ニ何カシラノ役割トシテ 取り込マレタ ノダロウ』

ペルセインの言葉の直後、霧夜は一瞬にしてペルセインの両腕をしがみつく様に掴んだ

「本当に！本当に椿姉は生きているんだな！？」

『アア』

ペルセインの言葉を聞いた霧夜は、安心した事で、そのままペルセ

インを掴んだ状態で眠ってしまった

『ヤレヤレ……』

ペルセインはゆっくりと霧夜と自分から離すと、地面に寝かせる
そして、ペルセインを紅い霧が包み込み、霧が消えた後には、女性
の姿となっていた

「……………」

女性の姿となったペルセインはしゃがみこみ、霧夜の頭をゆっくり
と撫でた

「…あの生意気な人間の少年が、こんなに成長するなんてね。これ
なら、桜との 約束 、果たせそう…かな？」

ペルセインは微笑みながらその場で立ち上がり、森の方を見ながら
言う

「出てきなさい」

すると、森から銀髪の少女…チンクがナイフを構えながら姿を見せた
ペルセインはチンクが警戒しているのを無視し、要件だけを告げた

「何時から見てたから知らないけど、貴女にお願いがあるのよ」

「…お願い、だと？」

「私の半身…霧夜が起きたら、こう伝えてほしいの。御姉さんは捜
してあげるから、貴方はもっと強くなりなさいってね」

ペルセインはチンクにそう告げると、先程の紅い霧とは違う黒い霧がペルセインを包み込み、そのまま姿を消した

チンクは霧夜に急いで近づき、隠れ家へと運んだ…

【第拾伍話】役割／約束（後書き）

霧夜「早速だが、レティウスさん、時空の旅人さん、朱神優希さん、感想ありがとうございます」

天使「にしても、久し振りの更新でしたね」

アルテミス「作者が1周年記念になにか馬鹿らしい事をする為と、テス勉つてのが遅くなった原因の主な理由ね」

さーせんした

霧夜「どうせ、あんま点取れねえ癖に」

うるせー

アルテミス「さて、次回からは少しコラボを予定してる……のよね？」

その通り

天使「では、次回もよろしくお願いします」

霧夜「んじゃ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3851v/>

異形の魂を宿す者

2011年10月10日03時25分発行